

学内広報

2014.4.23

no. 1453



平成26年度役員等の紹介
平成25年度卒業式・学位記授与式
平成26年度入学式・大学院入学式
根岸英一先生 名誉博士称号授与式
新しい英文略称 UTokyo のガイドラインを制定しました



平成26年度役員等の紹介

平成26年度役員等を以下のとおり紹介します。

総長 (任期)平成21年4月1日～平成27年3月31日		
濱田 純一		
理事・副学長 (任期)平成26年4月1日～平成27年3月31日		
前田 正史 (担当)総務、財務、施設		
松本 洋一郎 (担当)研究推進・研究倫理、大学院強化、病院		
長谷川 壽一 (担当)学生、環境安全、広報		
相原 博昭 (担当)総合的教育改革、入試、評価		
理事 (任期)平成26年4月1日～平成27年3月31日		
江川 雅子 (担当)社会連携、産学連携、国際特命		
戸渡 速志 (担当)事務組織、法務、人事労務、監査		
苦米地 令 (担当)コンプライアンス、人事制度企画		
監事 (任期)平成26年4月1日～平成27年3月31日		
有信 陸弘		
杉山 健一		
副学長 (任期)平成26年4月1日～平成27年3月31日		
小関 敏彦 (担当)学部教育改革、大学院教育改革、学術推進支援		
永田 敬 (担当)教養教育、進学振分け制度改革		
羽田 正 (担当)国際本部長、懲戒委員会		
原田 昇 (担当)科学研究行動規範委員会、産学連携本部長		
福田 裕穂 (担当)入試改革、入試企画室長		
野城 智也 (担当)TSCP室長、建設エンジニアリングオフィス統括、初中高等教育連携		
大和 裕幸 (担当)柏地区整備推進、学生体験活動		
吉見 俊哉 (担当)教育企画室長、大学総合教育研究センター長、文書館		
副理事 (任期)平成26年4月1日～平成27年3月31日		
鈴木 敏之 (担当)経営企画・教育制度		
中塚 数夫 (担当)経理・調達		
紺野 鉄二 (担当)男女共同参画、業務改革		
関谷 孝 (担当)教養教育改革		
総長顧問		
小宮山 宏		
根岸 英一		
清水 孝雄		
武藤 芳照		
佐藤 慎一		
総長特任補佐		
加藤 道夫 (担当)キャンパス計画		
中井 祐 (担当)復興支援、国際宿舍		
難波 成任 (担当)EMP		
白波瀬 佐和子 (担当)男女共同参画(ダイバーシティ)		
総長室顧問		
山田 興一		
岡本 和夫		
内藤 廣		
ステファン ノレーン		
尾越 和博		
総長特別参与		
齊藤 延人 (担当)病院経営		
山下 友信 (担当)教育改革		
北森 武彦 (担当)理系人材国際		

新役員等の略歴および就任の挨拶

新理事・副学長、新監事、新副学長、新副理事の略歴および就任に当たっての挨拶を以下のとおり掲載します。



理事・副学長

相原 博昭

Hiroaki Aihara

昭和53年3月 本学理学部卒業
昭和59年3月 本学大学院理学系研究科物理学専攻博士課程修了
昭和59年4月 本学理学部助手
昭和63年9月 カリフォルニア大学ローレンスバークレー研究所研究員
平成07年10月 本学大学院理学系研究科助教授
平成15年4月 本学大学院理学系研究科教授
平成24年4月 本学大学院理学系研究科長・理学部長
平成26年4月 本学理事・副学長
専門分野：高エネルギー素粒子物理学
研究内容：
1) 相原博昭『素粒子の物理』東京大学出版会, 2006年
2) 相原博昭 他（共著）『素粒子物理学ハンドブック』朝倉書店, 2010年

就任のご挨拶

理学系研究科長・理学部長の任の後、総合的教育改革、入試、評価等を担当する理事・副学長を拝命しました。濱田総長を支え、5年間の激務を勤め上げられた、知の巨人、佐藤慎一前理事の仕事を引き継ぐようにという、私にはおよそ重過ぎる任務を仰せつかりました。教育改革の具体的実行に微力を尽くしたいと思っております。私は、本学のさらなる発展のためには、国際化、多様化は必須であり、それに伴う困難は乗り越えるべきものだと思っています。今後も、そのような立場で発言し、行動していくつもりです。東大は幅が広く、底も深い巨大な船です。大きく舵を切っても容易には方向が変わりません。しかし、多くの水をかき分け、時間をかけて確実に自らの進

みたい方向に進んで行きます。多大な業務に伴う教育改革に、個々の教員が敢えて挑むのは、共感できる理念が根底にあるからであり、それが学生にとって善であるという信念があるからです。大学運営において重要なのは、本部と部局、そして部局と部局の間の相互理解とお互いへの敬意（respect）ではないかと思っています。個々の事情や立場を超えて、理念や信念を共にする者に敬意を払い行動できるかどうか、改革成功の鍵だと思います。そのためには、本部と部局、部局と部局の間の真摯なコミュニケーションが必須であり、私の任はその一端を担うことだと思っています。皆様のご支援をお願い申し上げます。



理事

苔米地 令

Rei Tomabechi

昭和56年1月 本学採用
平成09年4月 群馬大学人事課長
平成13年11月 本学人事課長
平成17年4月 文部科学省大臣官房人事課総務班主査
平成19年4月 同計画調整班主査
平成21年1月 同科学技術・学術政策局評価推進室長
平成23年4月 本学人事部長
平成23年7月 本学副理事（兼）人事部長
平成26年4月 本学理事

就任にあたって

このたび、理事として、主に「コンプライアンス」と「人事制度企画」を担当させていただくことになりました。

私は、昭和56年東京大学医学部附属病院分院に採用され、以降、文部科学省や文化庁、国立大学で、主に人事関係業務に携わってまいりました。平成23年からは東京大学で副理事、人事部長を務めさせていただき、今回、職員出身として理事就任を仰せつかりました。大変大きな責任を感じ、身の引き締まる思いがあります。今後、職員がその力を発揮し、東京大学の教育研究活動が益々発展することができるよう、誠心誠意、職責を全うしてまいりたいと思っております。

コンプライアンス事案関係では、昨今学内外で社会的信頼を揺るがす事態が起こっております。東京大学の全ての構成

員が、東京大学の社会的・公共的使命を自覚し、法令を遵守するのみならず、相互の人権を尊重し、高い倫理観を持って行動することができるよう、微力ではありますが全力を尽くしてまいりたいと思っております。

また、国立大学は第3期中期目標期間に向け、厳しい財務状況の中「人事・給与システムの弾力化」などの改革が求められております。東京大学では、クロス・アポイントメント制度など他の国立大学に先駆けた取り組みを既に種々進めておりますが、今後も現場からの声を大切に、更なる人事制度の企画に取り組んでまいりたいと考えております。

引き続き、皆様方のご指導、ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

明日の東京大学の発展に向けて

ご縁をいただき、引き続き東京大学でお世話になります。梶田淳二さんの後任として監事に着任いたしました。2007年7月、東大130キャンペーンの寄附募集活動を翌年3月のキャンペーン終了までの9ヶ月間お手伝いするつもりで36年ぶりに本郷に戻ってきました。

当時は本郷キャンパスの景観の変わり様に驚いたのですが、今はすっかり見慣れたものになってしまいました。さて、予定は未定にしてしばしば変更ありとは言いますが、その後、渉外本部長、卒業生室副室長、総長室顧問を経て、この度、監事を仰せつかることとなりました。

今、楽しんでいることは、①鎌倉淡青会の同好会活動：「座禅会@円覚寺」

と落語を楽しむ「咄の会」②時々の国内・海外旅行：昨年6月は友人5人とミュンヘンを起点としたドイツの旅を、本年2月は北海道網走の流氷と札幌の雪まつりを楽しみました③友人や仲間との一杯会、お誘いがあれば原則快諾をモットーとしています。

監事としての役割は今後ますます重要になってくると耳にしておりますが、どのような役割と責任があるのか、これから先輩である有信監事から教えていただいたり自分で勉強します。

微力ながら、明日の東京大学の発展に向け貢献したいと決意しています。よろしくお願い致します。



監事

杉山 健一

Kenichi Sugiyama

昭和46年3月 本学工学系研究科化学工学科修士課程修了
昭和46年4月 東亜燃料工業株式会社（現：東燃ゼネラル石油株式会社）入社
平成08年3月 東燃株式会社（現：東燃ゼネラル石油株式会社）取締役
平成09年3月 同社取締役川崎工場長
平成13年5月 財団法人東燃国際奨学財団理事長（現職）
平成14年5月 東燃ゼネラル石油株式会社代表取締役常務取締役川崎工場長
平成19年7月 本学副理事
平成20年7月 本学渉外本部本部長
平成24年4月 本学総長室顧問
平成26年4月 本学監事

教育改革の本格的な開始に向けて

このたび副学長を拝命いたしました。います。

学部および大学院の教育改革、ならびに学術推進支援を担当いたします。

学部の教育改革は、平成27年度からの新たな学事歴とカリキュラムの実施に向けて本年度が正念場であり、永田副学長とともに、これに全力で取り組みたいと思います。日本の「失われた20年」は世界の国際化に遅れた20年とも言われ、その間に世界の大学教育の国際化も急速に進みました。日本のトップ大学としてそれに対応し、世界で活躍し貢献できる“グローバルでタフな”人材を育成するためには、新しい学事歴とカリキュラムを遅滞なくスタートし、同時にそれを起点として、教育の国際化、実質化、高度化のための教育基盤やプログラムを持続的に整備・拡充することが重要と考えて

また、研究大学として世界レベルの学術研究を更に発展させるためには大学院教育の強化も不可欠であり、教育の国際化と実質化、優秀な人材の確保やその支援などについて、これまでの検討を引継ぎ、改革案の策定と実施に取り組んでいきたいと思っています。さらに、学術研究の一層の推進に向けて、外部資金の獲得や学内外の様々な連携を支援する全学的な仕組みや体制の整備を、松本理事を補佐して進めていきます。

これらの教育改革、研究支援を通して、東京大学の根幹をなす教育と研究の発展のために、微力ながら努力していきたいと思っていますので、どうぞ宜しくお願いいたします。



副学長

小関 敏彦

Toshihiko Koseki

昭和56年3月 本学工学部金属工学科卒業
昭和58年3月 本学工学系研究科金属工学専攻修士課程修了
昭和58年4月 新日本製鐵株式会社入社
平成06年3月 マサチューセッツ工科大学材料工学科博士課程修了
平成15年1月 本学大学院工学系研究科助教授
平成16年10月 本学大学院工学系研究科教授
平成23年4月 本学総長補佐
平成24年4月 本学大学院工学系研究科副研究科長
平成25年10月 本学総長特別参与
平成26年4月 本学副学長
専門分野：金属材料工学、接合工学
研究内容：

1) Koseki, et al., "Development of Multilayer Steels for Improved Combinations of High Strength and high Ductility", *Mater. Trans.*, 55 (2014): 227-237

2) Nambu, et al., "In-situ Observations and Crystallographic Analysis of Martensitic Transformation in Steel", *Acta Materialia*, 61 (2013): 4831-4839



副学長

原田 昇

Noboru Harata

昭和52年3月 名古屋大学工学部建築学科卒業
 昭和54年3月 本学大学院工学系研究科都市工学専攻修士課程修了
 昭和58年3月 本学大学院工学系研究科都市工学専攻博士課程修了
 昭和58年4月 日本学術振興会奨励研究員(都市工学専攻所属)
 昭和59年4月 計量計画研究所都市計画研究室研究員
 昭和60年4月 本学工学部助手
 平成04年4月 本学工学部助教授
 平成11年4月 本学大学院新領域創成科学研究科教授
 平成17年1月 本学大学院工学系研究科教授
 平成24年4月 本学大学院工学系研究科長・工学部長
 平成26年4月 本学副学長
 専門分野：都市工学、都市交通計画
 研究内容：
 1) 新谷洋二・原田昇ほか、『都市交通計画』第二版、技報堂出版、2003
 2) T. Kidokoro, N. Harata etc., *Sustainable City Regions: Space, Place and Governance*, Springer, 2008.

副学長就任にあたって

2年間の工学系研究科長・工学部長の後、副学長を拝命いたしました。担当は、産学連携本部長と科学行動規範委員会です。濱田体制の一端を支えることとなりました。

産学連携本部長は、前任の保立先生が三年間、整備された成果を受けての就任となります。産学連携本部の体制が再構築され、さまざまな活動が活発化しています。これらをうまく引き継いで、オープンイノベーションの構築等を進めていくことが第一の務めです。そして、それと同時に、我が国には前例のない新しい取組である出資金事業について、日本経済再生に向けた緊急経済対策としての位置づけを理解しつつ、東京大学としての同意を形成して

いくことが求められています。

一方、科学行動規範は、セルカン問題を契機として、部局長としても取り組んできた問題です。最近は、様々な部局で、従来にない規模や形態の問題が生じ、それらへの対応は、大学本来の教育研究運営業務の大きな負担となっています。私の役目は、これらの負担を必要以上に大きくしないように、科学行動規範委員会の機動性を高めて、無い知恵を絞り、事実の解明と認定に努めることに考えています。

いずれも、難題ですが、東京大学の教育研究運営活動の一助となるように、努める所存ですので、どうぞよろしくお願い致します。

退任の挨拶

このたび退任された理事・副学長、監事、副学長、副理事の退任に当たっての挨拶を以下のとおり掲載します。

退任のご挨拶

5年前に教育と入試を担当する理事・副学長に就任し、広い視野で東京大学の教育と入試の現状を眺めたときに感じたのは、海外のトップクラスの大学が優れた人材を吸収し育成するために激しい勢いで改革を進めている一方で、東京大学の改革は遅々として進まず、乖離は拡大しつつあり、事態を放置すれば日本の優秀な高校生たちが海外の大学を目指すようになるのではないかという思いでした。

東京大学の改革が進まない最大の理由は、組織の壁が高すぎるからです。学部の壁、学科の壁、研究室の壁と、東京大学のキャンパスは目に見えない壁が張り巡らされていて、ある組織が行った改革の成果が壁を越えて全学

前理事・副学長 佐藤 慎一

に波及することは稀でした。そもそも5年前には、学部教育の在り方について全学的に議論する場すら存在しなかったのです。

5年たって、全学的な学部教育改革と入試改革が進む中で、学部の壁は目に見えて低くなりました。東京大学の教育や入試の在り方を、自らの所属する部局の枠を超えて、全学的な視野で見直すことのできる能力を持つ人材の分厚い層が、教員にも職員にも育ちつつあります。その人たちに東京大学の将来を託して、私は後顧の憂いなく理事の職を退くことができます。5年間ありがとうございました。

理事退任のご挨拶

理事・副学長を退任いたしました。1年間でしたが、ご指導まことにありがとうございました。

担当は、産学連携、柏地区整備推進、危機管理、コンプライアンスでした。研究不正やコンプライアンスに関しては個別事案の処理に追われましたが、研究倫理アクションプラン策定やコンプライアンス総括室の設置など今後の対応の準備をすることが出来ました。科学研究行動規範に関する規則も今後示される文部科学省のガイドラインなどに対応する必要があり、また時効条項の設定も検討が必要です。

産学連携は出資金事業の大問題が残っております。出資金事業は、大学が自ら資金を持ち、自らの研究に投資、

前理事・副学長 **大和 裕幸**

やがて事業化を図るもので、リスクの管理、利益相反など学生の教育と研究を本務とする大学の根幹に関わる問題です。すでに投資事業実施会社の認可の段階ですが、産学連携本部や UTEC、TLO に蓄積された知識や経験をベースにゼロから考え直し、全学的なコンセンサスを得ることが必要です。

危機管理は事件事故対応が中心ですが、大規模地震の際の安全確保などの課題があり、環境安全本部と連携してシステムを構築しなくてはなりません。

残した課題が多くて心苦しい限りですが、今後は副学長として、柏地区整備推進、学生の体験活動を担当します。引き続いてのご指導を宜しくお願いいたします。

超遠距離通勤の2年間

私は、東京大学の皆様とは全く違う世界で生きており、22年前に日本の弁護士として初めてニューヨークに法律事務所を開設してからは、ニューヨークを拠点として、主として国際的な M & A や特許侵害訴訟その他の国際的紛争を取り扱ってきました。私は、平成20年4月から平成24年3月までの4年間、経営協議委員会の委員及び総長選考会議の委員を務めておりました。平成24年4月から監事を務めるようにとの要請を受けましたが、時間的にできるかどうかとても自信がありませんでした。しかし、非常勤なので、できる範囲内で結構ですからということで、結局お引き受けしました。私は、監

前監事 **梶田 淳二**

事をやっていた2年間で、合計14回ニューヨークと東京を往復しました。

私は、内部に入ってから、総長をはじめ、理事、常勤監事、副理事、副学長その他の執行部の皆様、部長の皆様及び監査課の皆様と接触することができ、皆様が本当に一生懸命仕事に励んでおられることに感服いたしました。

私は、本年4月からは再び経営協議委員会の委員に戻ることになりましたので、監事として得た貴重な経験を最大限生かしていけたらと思っております。

退任のご挨拶

2012年度から二年間、理系人材育成国際を特命として副学長の任にあたらせていただきました。人材育成と国際化は密接に関係していますが、主として海外からの優秀な学生や研究者を獲得して育成し、本学や日本で活躍してもらい、さらに世界や母国に羽ばたいてもらうには、学内外の体制や制度をどうしたらよいかということについて、総長濱田先生とご相談させて頂きながら進めて参りました。2012年度の学内の国際化環境を整備する方策のためのワーキンググループ「人材育成国際化環境整備検討ワーキンググループ」と、日本の高等教育とその中における本学の国際化とグローバル化のビジョンと戦略を検討する2013年度の総長懇談会「グローバル化時代の知識と経済」、そしてもうひとつ大学院に関す

前副学長 **北森 武彦**

る懇談会などを担当して参りました。また、ブリティッシュ・カウンシルをはじめ世界各所から高等教育の経済効果や国際戦略などについて討論する機会を頂き、世界の様子を知り、また世界が本学をどう見ているかを知ることにもなり大変勉強になりました。

こうした活動で皆様から頂いた貴重なご意見をまとめた報告書などは、さまざまな機会に学内外で活用されていると伺っております。また、こうした機会でないで得られない知見と人と人との繋がりには私にとりましても大変貴重なものであります。この場をお借りしまして関係の皆様方に厚く御礼を申し上げたいと存じます。ありがとうございました。

副学長退任のご挨拶

前副学長 **五神 真**

平成26年3月31日をもちまして、副学長を退任いたしました。濱田純一総長、役員各位をはじめ、教員、職員の方々からの多大なご協力のもと、研究システム改革と大学院強化を担当させて頂き、全学運営について多くのことを学ぶ機会に恵まれましたことを心より感謝申し上げます。

就任直後の平成24年4月に、総合科学技術会議において改正労働契約法に関連し、現場の意見を述べる機会を頂きました。常態化する有期雇用を是正するための法改正でしたが、大学や研究機関では、逆に雇用が不安定化することが顕在化しました。昨年末の自民党の議員立法により、研究職に対する特例法が成立し（本年4月施行）、当面の問題は回避されました。しかし、この騒動

で若手の雇用環境の劣化が深刻化していることが浮き彫りになり、人事制度の抜本改革が急務であると実感しました。この他、学術研究の長期戦略や大学院改革について真剣な議論をさせて頂いたことも、強く心に残っています。昨年4月には、東京大学の長期的な学術戦略について議論する部門を加えた学術推進支援室が発足いたしました。大学院強化については、総合的な教育改革の自然なつながりとして、国際性と卓越性を備えた東大らしい大学院の構築を目指した検討を行いました。どちらもこれからが本番です。立場は少しかわりましたが、これらの課題に引き続き取り組む所存です。今後とも皆様のご協力を賜りたくお願い申し上げます。

退任のご挨拶

前副理事 **清水 秀久**

平成25年度末をもって副理事・渉外本部長を退任いたします。渉外本部長として2年、副理事として1年という短い期間ではありましたが、全学の皆様からいただいた多大なご支援、ご協力に対し、あらためて御礼申し上げます。

東京大学は、2004年春に国立大学法人となり、その財務基盤を強化するため、同年秋に「東京大学基金」が設けられました。設立以来9年半が経過し、基金を通じた寄付金額は300億円となり、キャンパス環境の整備や学生・研究者への支援に成果を挙げるとともに、将来のための運用積立金も100億円近くとなりました。

今、東京大学は、総合的な教育改革への取り組みが構

想段階から実施段階へと進みつつあり、この成否が「世界の東京大学」と成る鍵を握っていると思われます。また、この改革の実現には財務面での負荷が相当厳しいものとなり、国家予算の制約から、「東京大学基金」を通じた外部からの経済的支援が不可欠なものと思われます。

東京大学基金は、設立10年弱で土台が固まり、上記の規模となりましたが「世界の大学」と評価される米国の著名大学の基金規模に比べると、まだまだ弱小と言わざるを得ない状況です。

総合的な教育改革と「世界の東京大学」の実現に向け、東京大学基金が更なる成長、拡大の段階に進むことを期待しています。

退任にあたって

前副理事 **宮川 光雄**

2010年1月に副理事（兼柏地区事務部長）に就任し、事務組織改正により同年4月からは兼柏地区事務機構長として4年間務め、2014年3月末に任期満了で退職いたしました。

柏地区での勤務は通算7年間でしたが、約20年前には柏キャンパス取得準備事務を担当いたしました。「東京大学・第Ⅲのキャンパス」として構想されてから現在までの短期間のうちに、多数の部局等の移転等（新設含む）および基盤整備が順調に進み、学融合を目指した教育・研究も大きく発展したことが感じられます。

そして、柏地区へ移転した部局等の事務組織も、移転

時には事務の集中化・合理化を目指した部課制でしたが、現在では基本的な考え方は踏襲しつつ、事務長を配置した事務機構に見直されています。今後の課題は、現在検討されている「柏地区キャンパスの将来構想」と共に、濱田総長が策定された行動シナリオ内の「事務の3S（スリム、スマート、スピーディ）」を踏まえ、柏地区ならではの新しい事務体系を構築することです。

最後に、これまで多くの教職員の皆様からご支援、ご指導を賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。また、東京大学の益々のご発展と皆様方のご健勝を心より祈念いたします。

平成25年度卒業式



平成25年度卒業式が、3月25日（火）に、有明コロシアムにおいて挙行されました。

式は、10時に開式し、約2,500名の卒業生（卒業生数3,084名）が出席しました。

開式に先立ち、音楽部管弦楽団によるワーグナー作曲の「ニュルンベルクのマイスタージンガー前奏曲」の演奏があった後、濱田純一総長をはじめ、理事・副学長、理事、各学部の学部長及びご来賓（各学部の同窓会等代表者）の方々がアカデミック・ガウンを着用のうえ登壇し、ご来賓の紹介があった後、開式となりました。

はじめに、濱田総長から、各学部卒業生代表に、順次、学位記が授与されました。

続いて、濱田総長から卒業生に向けた告辞が述べられた後、卒業生総代（法学部 山口礼さん）から答辞が述べられました。

その後、音楽部合唱団コールアカデミー、音楽部女声合唱団コーロ・レティツィアによる東京大学の歌「大空と」の合唱、出席者全員による同じく東京大学の歌である「ただ一つ」の斉唱をもって式を終了しました。

なお、本式典では、壇上においての手話通訳及びモニターでの式典模様（手話通訳の映像と字幕も表示）の放映を行い、ご家族など

約2,900名が出席しました。

平成25年度卒業式 総長告辞

皆さん、ご卒業おめでとうございます。このたび学部を卒業する学生数は、合計3,084名になります。うち留学生は57名です。東京大学の教職員を代表して、皆さんに心よりお祝いを申し上げます。また、ご家族の皆さまにも、この晴れの日を共にと多数ご出席いただき、感謝申し上げます。今年度の卒業式は、まだ安田講堂の耐震改修工事が続いていますので、昨年度と同じくこの有明コロシアムで執り行っていますが、多くの皆さんにとって、日本武道館での入学式以来はじめて再び一堂に会することが出来たという意味で、思い出深い卒業式になるだろうと思います。まことに月日が経つことはやさを感じます。

卒業してからの皆さんの進路はさまざまでしょう。引き続き大学に残って大学院へ進学



東京大学総長

濱田 純一



弾き語りのサークル活動も含めて4年間で多くの人と知り合えたのが収穫でした。4月からは大学院で有機化学を研究するつもりです。(松田祥吾さん／農学部応用生命科学課程)



春からは都庁で都立学校に関する仕事をします。市民の視点に立って動ける人になりたいです。馬術部だったので、たまには馬にも乗りたいですね。(浅野珠生さん／経済学部経営学科)

する人もいれば、社会の現場に出ていく人もいます。どういった道を歩むにしても、皆さんには、「逃げない」という一言を、心に留めていただければと思います。これからの長い人生の間には、思いがけないことが起こります。といいますか、思いがけないことが起こるのが当たり前です。そうした時に戸惑うことなく、社会でいかに困難な場面に遭遇しても、あるいは研究の上で大きな壁に突き当たっても、「逃げない」というその言葉を思い起こして、正面から状況に向き合ってもらいたいと思います。

「逃げない」という言葉を 思い起こして状況に向き合う

私があえて、「逃げない」という強い言葉を用いて呼びかけをしている理由は、皆さんが、とりわけ豊かな知識を持ち、鍛え抜かれた思考力を具えた存在であるはずだからです。この東京大学では、皆さんの知的な力を、あるいは社会的な力を最大限に伸ばせるようにと、教職員が工夫を重ねてきました。皆さん自身も、そのように努めてきたことと思います。それによって培われた力をいかなる状況下であれ十全に発揮することは、皆さんに対する社会からの期待であり、また皆さんの社会に対する責任でもあります。

もっとも、逃げるということは、ある意味で人間の本能の一部のようなところがあります。とりわけ災害や事故などによって身体に直接的な危険が及ぶ場合など、逃げるのは当然であるとも言えます。また、日々の仕事や暮らしの中でも、さまざまな事象に直面して逃げたいという気持ちがしばしば生じるのは、自然なことでもあります。しかし、自分の知的な力、精神的な力を振り絞ることで、社会にとっての危機を乗り越え新しい道を切り開くことが求められているような場面では、最後まで逃げないで取り組みを続けることが、皆さんのようなエリートの責任です。

いま「エリート」という言葉を使いましたが、東京大学がその依って立つべき理念と目標を示している東京大学憲章は、育成する人材について、「世界的視野をもった市民的エ

リート」という言葉を用いています。この憲章が制定された経緯を記した当時の文書を読むと、エリートという言葉を使用することについては最後まで慎重論があったと述べられていますが、それは、この言葉が持つ特権意識的な負の側面を危惧したためであろうと想像します。ただ、最終的には、「歴史的、社会的な自己の使命・役割を自覚する」そのことをエリートの資質として捉えるという理解の上に立って、この概念が憲章の前文の中に組み込まれました。

さらに、ここでは、単なる「エリート」ではなく、「市民的」という形容がなされていることに注意しておきたいと思います。この点については、「国境をこえて地球大で活動する存在」という意味で『市民』を理解することから生み出された表現であった」という説明が、やはり当時の文書にあります。今風に言えば、グローバルであるという資質を意識した表現ということで、きわめて的確に現代的な課題を見通していたと思いますが、ただ正直なところ、そうした含意と「市民」という言葉とのつながりは、これだけではまだ少し分かりづらいところがあります。

この「市民的」という概念については、憲章の制定当時に教育学部長をお務めになっていた藤田英典先生の、「民主制時代のエリート」という言葉が背景にあったという話を聞いたことがあります。その言葉の説明は、先生が書かれた『教育改革』という本の中に記されていますが、それによれば、「民主制時代のエリートの特徴・要件は、卓越したメリットの保持者でもなければ、むしろ権力保持者でもない。そうではなくて、社会生活のさまざまな場面で、そこに参加し、そこでの活動や集合的な意思決定をリードする資質をそなえた者である」、ということです。また、「どれだけ多くの価値を身体化したかということよりも、身体化した価値を他のメンバーとどれだけ共有できるかが重要だ」、そして、「孤高性ではなくて、参加性(献身性)・共生性(公共性)が問われるということである」、とも記されています。

これらを要するに、「市民のエリート」と

いう時には、一つには、「歴史的、社会的な自己の使命・役割を自覚する」、そしてもう一つには、自分が培った力を社会的参加を通じて他の人々と共に生きるために活用する、といった含意が込められているだろうということです。私は、このいずれの要件を皆さんが満たしていくにあたって、「逃げない」ということは基本として求められる姿勢であると考えています。

まず、「歴史的、社会的な自己の使命・役割を自覚」していること、という要件について言えば、「自覚する」という言葉の中には当然、その自覚に相応しい行動をとる、ということが求められているはずです。「逃げない」というのは、そこでの行動に当然に組み込まれて期待されている態度です。かくいう私自身もこれまで、人生の中で逃げたいと思ったことが何度もありました。また、正直に言えば、時折は実際に逃げたこともあります。しかし、逃げないで正面から課題に取り組んだ時の結果は、多くの場合において、自分が成長するきっかけとなり、社会に役立つ成果を生み出し、あるいは人から信頼を受ける機会となったとも感じています。

とはいえ、先ほども言いましたように、逃げるとするのは普通の人間にとってはきわめて自然な行動です。そして、そうした行動様式には、意外なほどの広がりがあります。これはいわば古典に属する本ですので、皆さんの中にも読んだ人が、あるいはタイトルだけでも聞いた人が少なからずいると思いますが、エーリッヒ・フロムというドイツ生まれの社会心理学者の著作で、『自由からの逃走』というものがあります。この本は、私が教養学部に入ってすぐに、たぶん社会学の講義だったように思います。課題図書といったような形で読まれた本です。受け身で読まれた本ではあるのですが、その詳細な分析的記述によって、はじめて学問というものに触れることが出来たような新鮮な感動を受けたことを、いまでも記憶しています。

きっと皆さん一人一人も、学部生活の間に、そのように強く記憶に残る本に触れた経験をしたことと思いますが、この『自由からの逃



私の大学生生活は運動会応援部チアリーダーズKРАНZ(クランツ)とともにありました。卒業後は生保でがんばります。今後もKРАНZを応援してください！(村上由真さん/法学部第3類)



チアリーダーズKРАНZで、4年次には新人監督を務めました。4年間は充実の一語であつという間に過ぎてしまいました……。春からは銀行で働きます。(永井彩さん/経済学部経済学科)



走』という本は、1941年、第二次世界大戦が始まって間もなくの時期に刊行されました。全体主義の潮流が世界に広がっているという時代状況を背景に書かれたものですが、近代化によって自由というものを手に入れたはずの人々が、なぜナチズム、ファシズムというような自由の価値とは正反対のイデオロギーを受け入れてしまうのか、受け入れてしまうどころか望みさえするのか、ということが、心理学的な、精神分析的な手法によって描かれています。

「自由の重荷」と市民的エリートの重荷

そこでのキーワードが、「自由の重荷」という言葉です。この本の序文の中でフロムは、次のように述べています。ここでは、かつて東京大学で教鞭をとられた日高六郎先生による訳を使わせていただきますが、すなわち、「自由は近代人に独立と合理性とをあたえたが、一方個人を孤独におとし入れ、そのため個人を不安な無力なものにした。この孤独はたえがたいものである。かれは自由の重荷からのがれて新しい依存と従属を求めるか、あるいは人間の独自性と個性とにものづいた積極的な自由の完全な実現に進むかの二者択一に迫られる」、というものです。

この文章は、いわば自由の逆説について述べられたものですが、ここで「自由」という言葉を「エリート」という言葉に置き換えて考えてみて下さい。皆さんがしばしばエリートであると社会から見做されることを真剣に受け止めようとする時、そこでは、普通は容易には得がたい誇りと同時に、期待される役割の重さ、その重圧というものをきつと感じることと思います。すでに皆さんの多くは、子どもの頃から、あるいはまた東大生として、多かれ少なかれそうした二つの面を感じながら生きてきたであろうと思いますが、これからの人生において、エリートとしての孤独や不安、周りの期待などの重荷に耐えかねてエリートたることから逃げるのではなく、この東京大学において世界的にも最高水準のレベルの学問を修めてきたことに相応しい役割を、

皆さんに果たしていただきたいと願っています。

そうした重荷は、仕事の上で難しい課題に直面した時など、とりわけ痛切に感じられるはずです。研究生活においても、論文の執筆や実験の成果に行き詰った時に感じることもあるでしょう。行き詰った場面で、安易に他の人の文章を窃用したり、あるいは実験データをねつ造したりするといった行為は、まさしく逃げているということに他なりません。皆さんが、この大学で多くのことを学んできたのは、困難な課題に出会って「逃げない」ためです。逃げないことによって、自分自身に誇りを持ち、自分を成長させ、また社会により大きな貢献を行ってもらうためです。その過程で失敗もあることは、問題ではありません。

「逃げない」という姿勢は、他の人々とのかわりを持つ場合にも大切になります。先ほど、「市民のエリート」という言葉の説明のところで、「市民的」という概念には参加や共生という要素が含まれていることに触れました。皆さんも経験していると思いますが、他の人々と共に考え何かを実現するということは、しばしば、一人で課題に取り組むより大変な場合も少なくありません。そこでは、自分とは違った生き方をし、異なった考え方や価値観を持っている人たちとコミュニケーションをしていくという「重荷」が、新たにくわわるからです。そうした状況においても逃げないことを、「市民のエリート」は求められています。

このような協働の場面で皆さんには、ある分野の専門家という役割を期待されることも少なくないだろうと思います。その意味で、東京大学の卒業生がそうあるべき「市民のエリート」像は、メリトクラットの要素をやはり抜きにしては考えられないと私は思っていますが、重要なのは、その専門性をどのような形で発揮するかということです。さきに大阪大学の総長をお務めになった鷲田清一先生は、臨床哲学という分野を提唱されたことで知られていますが、「パラレルな知性」という言葉を使っておられます。東日本大震災



と原子力発電所の事故を踏まえた科学のありよう、科学者のありようを論じる中で用いられている言葉ですが、それによって鷲田先生は、専門家として当然に期待される「専門的知性」と同時に、場合によってはそれを棚上げしてでも一般の人たちと一緒にさまざまな観点・視線から状況を議論し考えることの出来る「市民的知性」を求めています。そうした「市民的知性」の不可欠の要素となるのは、豊かなコミュニケーションの能力とともに、専門性の枠組みにはとらわれない、他の人々に対する想像力—他の人々が置かれている状況や、その心情、あるいは考え方などに対する想像力—でしょう。

市民のエリートには「パラレルな知性」が必要

このような「パラレルな知性」を、まさしく「市民のエリート」は求められているのだと私は思います。「パラレルな知性」の担い手であることは大変です。しかし、皆さんが、「市民のエリート」として、逃げないでこうした役割を果たすことによってこそ、フロムが描いたような自由の逆説に陥ることなく、無力でも孤独でもなくなるチャンスを得ることができるはずです。フロムは、「自由の重荷」からの解放の道を、個人が自発性をもって外界にかかわっていくことに見出そうとしていました。それが、「積極的な自由」という言葉で呼ばれていたものです。この答えそのものは観念的・抽象的であるという評価を必ずしも免れえない気はしますが、ただ、いまお話ししたように、皆さんが参加や共生を求められる場面で、逃げることなく他の人々とかわっていく時、そこでは、フロムが「積極的な自由」という言葉で期待していたものと相通ずる、一つの具体的な像が姿をあらわしてくるようになります。

いま学部での学業を終えて新しい世界に一步踏み出そうとしている皆さんが、これから出会うであろうさまざまな課題に、決して「逃げない」で正面から向き合い、東京大学憲章が目標とする「市民のエリート」としての姿を具現していつてくれること、そのこと



卒業生 VOICE
学部や学生団体ドリームネットなどで面白い友達にたくさん出会えた4年間でした。大学院に進学し、生体内で使えるマテリアルを開発します。(尾花満衣子さん／工学部化学生命工学科)



卒業生 VOICE
塾とレストランのバイトで忙しい学生生活でした。春からは海外インターンとしてニューヨークに滞在し、スタートアップ企業のお手伝いをします。(縄谷まりあさん／経済学部経済学科)

を心から願って、私からの告辞とします。皆
さんのご健闘をお祈りします。

〈平成26年(2014年)3月25日〉

答辞

卒業生総代

法学部

山口 礼さん



本日は、私たち卒業生のためにこのような
盛大な式典を催していただき、誠にありが
とうございます。ご多忙のなか、教職員の皆様・
御来賓の方々のご臨席を賜りまして、卒業生
一同心より御礼申し上げます。

私たち卒業生にとって、大学生活は、仲間
とともに自分にできることの幅を広げ、それ
を深めようとした毎日でした。それは、古く
からの蓄積の上にそびえたつ知の担い手たら
んと、先達の語る言葉に耳を傾け、自分の頭
や体を動かしてその吸収に努めた日々であっ
たとともに、おのおのが自分なりの関心を胸
に社会に身を置き、そこで何らかの役割を果
たすべく絶えず移ろいゆく現実と向き合った
日々でもありました。こうしてじっくり自ら
を成長させる時間を持ったことは、私たち一
人ひとりがこれからの人生を歩む上で代えが
たいものとなるはずです。

私自身は、法学部で学ぶ機会をいただきま
した。法学と政治学は、異なる価値観や関心
を持つ人々がともに生きる社会での、規範や
制度のあり方、結論の出し方を扱います。こ
れはまさに、多様性を生かしきれずにもてあ
まし、答えを出すこと、それに皆が納得する
ことの難しさにあがく現代社会に対して、実
に示唆的だっただけでなく、私たちにより
普遍的な思考をも与えてくれるものでした。
人間の本質や様々な概念の探究、理論と現実
の間の絶えざる往復、過去や未来と現在の連
続性といった多様な視角を、自分が現実を認
識し働きかける中でどう立ち上げるかとい
うことは、私の今後の大きな課題です。

東京大学は、様々な課外活動の場でもあり

ました。学部や大学、出身地や年齢の垣根に
必ずしもとられず、ゆるやかな共同体を作
りともに歩んでゆく中で、それぞれが大学の
門の外でしてきた様々な体験を共有し、時
には意識的に、時にはいつの間にかお互いへの
理解が深まっていくということの充実感は、
他では得られないものでした。

こうして私たちが自分にできること、わか
ることを増やしていった日々は、新しい知識
や技術の登場により、人間にとってもでき
ることやわかることが急速に増えていった時代
でした。一方で、東日本大震災からの復興や
原子力発電所の問題、自然災害や環境問題、
経済危機や世界各地で続く紛争といった現実
からは、人間にはできないことがまだまだた
くさんあり、そしてできることは必ずしもす
べきこと、してよいこととは同じではないと
いうことを見せつけられました。

このような世界では、東京大学の学生とし
てこれまでしてきたように、自分、そして人
間の能力を高めるという営みに参加するだけ
ではなく、その限界や使い方に対しても鋭敏
な感覚を持つことが要求されます。厳しい現
実や他者の視線を意識しながら、自らの力量
や信念に批判の光を当て続けることは、時に
苦しく痛みを伴うものでしょう。とはいえ、
その困難や人間の無力さを言い訳に、現実か
ら逃げることは許されません。何らかの判断
を下すことは、時に他の道を断ち切ることで
あり、野蛮で恐ろしいことでもありますが、
それを放棄することは、人間としての責任を
放棄することでもあります。私たち卒業生は、
日夜変貌し続ける世界を前に、おごることも
臆することもなく、常に自分をありのままに
把握し、これからの自分、そして人間が進む
道を選ぶという挑戦に向き合っています。

最後になりましたが、常に私たちの前を走
り続け、未熟な学生たちを教え導いて下さ
った先生方、大学生活を支えて下さった職員
の皆さま、競い合い、支え合い、認め合った友
人たち、私たちが信じ、期待し続けてくれた
家族に、心から御礼申し上げます。そして、
東京大学の輝かしい発展を心から祈念いた
しまして、答辞とさせていただきます。



勉強ばかりかと思っていま
しましたが学部生活は予想以上
に楽しかったです。院に進
学して系外惑星を観測しま
す。東大もコスプレ卒業式
になるといいのに。(鶴山太
智さん/理学部天文学科)



野球サークル「タクティク
ス」の中堅手で、上の鶴山
君がいる「セローリ」はラ
イバルでした。大学院で素
粒子物理学に邁進したいと
思っています。(笹山悦宏さ
ん/理学部物理学科)



平成25年度学位記授与式



式次第

1. 奏楽
2. 開式
3. 学位記授与
4. 総長告辞
5. 修了生答辞
6. 合唱
7. 閉式

平成25年度学位記授与式が、3月24日（月）に、有明コロシアムにおいて挙行されました。

式は、10時に開式し、約2,400名の修了生（修了者数3,912名（修士課程2,753名、博士課程851名、専門職学位課程308名））が出席しました。

開式に先立ち、音楽部管弦楽団によるワーグナー作曲の「ニュルンベルクのマイスタージンガー前奏曲」の演奏があった後、濱田純一総長をはじめ、理事・副学長、理事、各研究科長及び各研究所長がアカデミック・ガウンを着用のうえ登壇し、開式となりました。

はじめに、濱田総長から各研究科・課程の修了生代表に、順次、学位記が授与されました。

続いて、濱田総長から修了生に向けた告辞が述べられた後、修了生総代（数理科学研究科博士課程 柏原崇人さん）から答辞が述べられました。

その後、音楽部合唱団コールアカデミー、音楽部女声合唱団コーロ・レティツィアによる東京大学の歌「大空と」の合唱、出席者全員による同じく東京大学の歌である「ただ一つ」の斉唱をもって式を終りました。

なお、本式典では、壇上においての手話通

訳及びモニターでの式典模様（手話通訳の映像と字幕も表示）の放映を行い、ご家族など約2,500名が出席しました。



東京大学総長

濱田 純一

平成25年度学位記授与式 総長告辞

本日ここに学位記を授与される皆さん、おめでとうございます。このたび大学院を修了する学生の数は、修士課程2,753名、博士課程851名、専門職学位課程308名です。合計で3,912名となり、そのうち留学生は431名で一割を超える割合を占めています。晴れてこの日をお迎えになった皆さんに、東京大学の教職員を代表して、心よりお祝いを申し上げます。また、これまで長い期間にわたり、皆さんの勉学を支え続けて下さったご家族の皆さまにも、お祝いを申し上げたいと思います。

今年度の学位記授与式は、安田講堂の耐震改修工事がまだ行われていますので、昨年度に続いて、この有明コロシアムで執り行うこ

とになりました。本日、この場に、これからの日本社会、そして世界の国々の科学や技術の卓越性を、あるいは文化や制度、経済などの豊かさを、支えていくことになる知性が一堂に結集していることに、深い感動を覚えています。皆さんの中には、これからさらに研究を続け学問の世界にいつそう奥深く分け入っていくとする人もいれば、いよいよ大学から離れて社会のさまざまな現場で活躍しようとしている人もいます。

どのような道に進むにしても、皆さんは、これまで大学院で精一杯に培ってきた専門の力を存分に生かしながら、これからの人生を送り、社会に対する貢献を行っていくことになります。そうした優れた専門家としての道を歩んでいくとする皆さんを送る言葉として、生涯にわたって教養の学びを続けてもらいたいということを、お伝えしたいと思います。それぞれの分野で専門を生かしていくにあたって、つねに専門以外の事柄にも大きく目を開いて、新しい知識や異なったものの見方や思考の方法を絶えず学び続けることで、皆さんの研究や仕事、そして人生を豊かにしていただきたいと思います。

生涯にわたって「教養の学び」を続けよう

教養の学びをしっかりと続けてほしいということは、実は、昨年の春に、新しく大学院に入学する皆さんにも伝えました。それによって、自らの専門性を鍛えていくとともに、自由な精神を具えた人格としての成長を遂げてもらいたいという話をしました。同様のことを今日皆さんにもお話ししたいと思った理由は、一つには、皆さんが大学院を修了して専門家として最初のステップを踏み出すタイミングでいまだ一度、知的な視野をつねに広く持つことの大切さを思い起こしてもらいたかったということと、もう一つには、最近、教養の学びということの意義について、改めて目を開かれる文章に出会ったからです。それは、今日この式典の壇上にもいらっしゃる、教養学部長・総合文化研究科長の石井洋二郎先生



大学院生活では勉強に十分打ち込むことができました。春からも引き続き勉強に励み、クリニックに所属して外科医の道を歩みます。
(土居健太郎さん／医学系研究科外科専攻／博士)



原田研究室で画像処理（イメージング）の研究をしてきました。春からは就職先のカメラメーカーで研究の成果を活かしたいです。
(井上匠さん／情報理工学系研究科創造情報学専攻／修士)

の文章です。昨年末の『教養学部報』に掲載された「グローバル化時代のリベラルアーツ」と題する文章がそれですが、そこで石井先生は、教養という概念の見直しの必要性にも言及しながら、この概念としばしば絡めて論じられる「リベラルアーツ」という言葉に触れて、「これは要するに、人間を種々の拘束や強制から解放して自由にするための知識や技能を指す言葉だった」と指摘されています。その上で、現代人がリベラルアーツを学ぶ意味を次のように記しておられます。すなわち、「種々の制約によって私たちの人間関係や社会活動は否応なく限定されている。言ってみれば、私たちはみな有限であるがゆえに、何重もの不自由さに囲い込まれた存在なのである。だからそうした不自由さから自らを解放するために（言葉本来の意味において『リベラル』になるために）、私たちは未知の外国語を学んだり、異なる分野の学問を勉強したりしなければならぬ」、ということですが、この考え方には、私も同感します。

専門の道を究めていくこと、それと自由であることとの関係は、一瞬よく分からなくなるような感もあります。専門の道を究めるのは、「脇目もふらずに」という言葉が使われることもあるように、きわめて禁欲的に、ある一筋の道に専心してこそなされうるものです。いわば、自由の拘束です。しかし、いくら狭い分野に全力を注ぎ込む場合であっても、その時皆さんの精神は自由であるはず。そうでなければなりません。自由であるからこそ、好奇心が生まれ、新しい概念や論理が湧き出し、発見や工夫を生み出すことができるのです。

ただ、そうした場面であっても、と言いますか、自分は自由であると思い込んでいる場面であるからこそなおさら、自分は本当に自由なのか、と問い直してみることが大切です。おそらく皆さんの中にも、専門的な研究を深めていく中で、ふと、自分は何やら固定観念に囚われているのではないか、という感覚に襲われた人も少なくないのではないかと思います。それがまさしく、自分の知性や精神は本当に自由なのか、自由に思考しているのか、

と半ば無意識的に感じている瞬間です。そして、そうした瞬間を越えた時に、思いがけないアイデアが浮かんできたという経験をした人もいるはずだと、私は自分の学問の経験を振り返って、そう想像します。

マンハイムが記した「存在被拘束性」という概念

こうした話をしていると、私は、もう半世紀近くも前に教養学部時代に学んだ、まさに一般教養の一部として学んだ、カール・マンハイムという人の「存在被拘束性」という概念を思い出します。これは、「人間の社会的存在が人間の意識を規定する」といったマルクス主義の階級意識論にある部分は重なっているところもあり、私のような1960年代末から70年代はじめの頃を大学紛争の中で過ごした世代には、何となくそうした概念を記憶している人も少なくないと思います。

このマンハイムという人は、ハンガリー生まれの社会学者でドイツやイギリスの大学で教鞭をとったのですが、1929年に『イデオロギーとユートピア』という本を著しています。ここでは、かつて私も教養をいただいた高橋徹先生が翻訳にかかわっておられる日本語版を使ってお話をしたいと思いますが、そこでは、「あらゆる歴史上の思想は事実上立場に拘束されている」というのが近代の歴史主義と社会学のもたらした洞察である、ということがベースとなる舞台設定です。この命題は、いわゆる知識社会学、すなわち、知識や認識などのありようを時代や社会構造とのかわりにおいて理解しようとする学問分野の基本枠組みとして提示されているのですが、ここでは、先ほどからお話ししている、専門と教養という観点に無理矢理引き付けて、私なりの意味づけをしておきたいと思います。マンハイムの表現を借りると、「認識視角やカテゴリー上の道具立てが社会的に拘束されていることは、かえって現実への根ざしを意味し、特定の存在領域を把握するうえで、いっそう大きな力をもつチャンスに恵まれることになる」、とあります。つまり、専門分野の知識や思考方法に十分に慣れ親しむことは、



修了生 VOICE
春からは博士課程に進学します。素粒子物理学の研究者として生きていきます。学部時代は千葉大学でオーケストラをやっていました。(西村美紀さん／理学系研究科物理学専攻／修士)



修了生 VOICE
上の西村さんとは同じ研究室で、とてもお世話になりました。春からも博士課程で一緒なのでこれからも互いに刺激し合っています。(小坂井千鈺さん／理学系研究科物理学専攻／修士)



それとして研究を深化させていく上で意味のあることだ、ということになります。その通りです。

ただ、マンハイムはさらに、次のように続けます。少し長い引用になりますが、「しかし、社会や現実根ざしていることは、たんにチャンスを意味するだけでなく、また現実による束縛をも意味する。ある特定の立場にとっては、それ以上自分では拡大できないようなある種の視野の限界がある。ある立場をとる以上、免れることのできない視野の狭さや制限を、対立する他のさまざまな立場によって克服するために、たゆみなく前進しながら努力を重ねるところにこそ、生の生たるゆえんがあるのではなからうか」、という主張です。

自らの専門という立場を時折は越えてみる

こうした考え方を私の言いたいことに引き付けて言えば、自らの専門という立場を時折は越えてみること、つまり専門の枠にとどまることによって「免れることのできない視野の狭さや制限」に対して、他の専門分野が具えているであろう多様な視野を広く学び続けるという姿勢を崩さないことが、まさしくマンハイムのいう、「たゆみなく前進しながら努力を重ねる」ということに他ならないのであり、「生の生たるゆえんがある」－これは、「専門家が本当の意味での専門家たるゆえんがある」と言い換えてもよいかもしれませんが－ということになるのではないかと、私は考えています。

すなわち、これから皆さんが、研究の道に進んでさらにその専門の分野を究めていくにしても、あるいは学んだ専門知識を社会の現場で生かして行くにしても、自らの専門の枠の中でいっそうの知識や方法を身に着けるために学び続けることは当然として、同時に、専門の枠の中だけでは自分の知識や想像力に限界があるのではないかと疑いを持つこと、そして、その限界を越えるために絶えず努力を続けることが大切です。そこで、皆さんに、教養の学びを生涯にわたって継続してもらいたいと思うのです。

一つの専門分野を越えて複数の多様な専門分野間の協働が必要なことは、近年、さまざまな社会的課題が複雑な構造として立ち現れてきている状況に直面して、しばしば指摘されています。環境保全、防災、エネルギーや原子力、遺伝子治療や再生医療、少子高齢化など、いずれをとっても一つの専門分野からだけでは解決の難しい問題です。そうした場面で、他の分野との協働を通じて得られるのは、端的には新しい知識でありあるいは方法ですが、さらには異なった視野、視座、つまりものの見方や想像力の持ち方といった、より根源的な価値も含まれるはずだということは、意識し、期待しておいてよいように思います。

教養の学びを続けていくためには、いろいろな方法があります。自分自身で専門の枠を越えて異なった分野の本を読むというのは、とりえず身近な方法です。さらには、できるだけ多くの人と、とくに違った分野の人たちと意識的に交わりを持つことも大切です。これからの時代は、大学院の課程を修了して社会に出てからも、大学と関わりを持ち続けていただくこともよいと思います。

社会に出てからも東大の学びの機会を活用しよう

専門分野の研究や仕事に邁進するかたわらで、自分の教養世界を広げようと意識的に努力することは、たしかに大変です。しかし、例えば、このたび修士課程を終えて博士課程でさらに学びを続けようとする人には、いま進めている教育改革の中で、分野横断的に学べるようなカリキュラムが強化されつつあります。また、これから社会に出ていく人たちには、近年東京大学では一般向けの公開講座やさまざまな分野の公開シンポジウムがずいぶん増えてきていますので、ぜひ活用していただきたいと思います。あるいは、この間卒業生と大学とのネットワークが強化されてきた中で、卒業生向けの教育プログラムも少しずつ拡充されています。さらに一般的に言えば、海外の大学でもしばしば見られるように、もっとたくさんの社会人が大学で学び直

しをする機会が増えるのとよいと考えています。企業の経営者とも時々話をしますが、社会全体でそうしたキャリア設計により高い価値が置かれるようになるべきだと思いますし、大学としてもそのような動きに応えられる仕組みをもっと整備していかなければならないと考えています。

こういった機会を活用しながら、専門以外の分野についても多様な学びの機会を持ち続けることによって、皆さんは、その専門の力そのものもさらに鍛え、研ぎ澄ますことができるはずだと考えています。また、きっと、皆さんの人生もさらに豊かなものになっていくはずです。先ほど、カール・マンハイムは、「ある立場をとる以上、免れることのできない視野の狭さや制限を、対立する他のさまざまな立場によって克服するために、たゆみなく前進しながら努力を重ねるところこそ、生の生たるゆえんがある」と、ちょっと聞くと大げさすぎるかもしれないと思えるほどの表現をしていましたが、大学院での学びを経て知的な専門家としてのスタートを切った皆さんは、さらに教養の学びを意識的に続けることによって、この言葉を実際に自分自身において実現することの出来る十分な可能性を持っていると、私は信じています。

皆さんが、深い専門性と豊かな教養を併せ持つことによって、たえず自らの知的精神の自由度を高めながら、これからの日本を、そして世界を、力強くリードして行くことを期待して、私の告辞を終えることにします。

〈平成26年(2014年)3月24日〉



研究室ではラインの改良などの生産技術の研究に携わりました。4月から電機メーカーでビデオカメラの設計の仕事をします。(玉田智樹さん/情報理工学系研究科創造情報学専攻/修士)



南米各国の自動車燃料転換効果を研究しました。春からはコロンビアのセメント会社で働きます。W杯は…負けませんよ。(リリアナ・ゴンサレスさん/工学系研究科都市工学専攻/修士)



上智大学から東大に来て主に清朝以降の中国近現代史を学びました。その成果を、春から勤める服飾関連の商社で発揮したいです。(望月美咲さん／総合文化研究科地域文化研究専攻／修士)



環境分析化学研究室で福島由来の放射性物質の研究を行いました。4月からはTV局で理系の知識を活かせる報道記者を目指します。(添盛晃久さん／総合文化研究科広域科学専攻／修士)

答辞

修了生総代
数理科学研究科博士課程
柏原崇人さん



本日は濱田総長をはじめ、諸先生方のご臨席を賜り、このように盛大な学位記授与式を催していただき、修了生を代表して厚く御礼申し上げます。また、只今濱田総長よりご告辞と激励のお言葉を賜りましたこと、感謝申し上げます。

本日この場集った修了生は、東京大学大学院に入学し、修士課程、博士課程または専門職学位課程で日々研究に励んでまいりました。

私の場合は応用数学を専門分野とし、紙と鉛筆による厳密な証明とコンピュータを用いた数値計算が主要な研究手法となる数値解析を専攻いたしました。数学という理論面と、数値計算という応用面が密接に関連していることを学んで深く感銘を受け、自身の研究においても、理論と応用が互いに整合するような結果を得るために悪戦苦闘する中で、知的好奇心を探究することができました。以上は私の経験ですが、修了生一人一人の研究の内容は、専門分野に応じて様々に異なっていることでしょう。

一方で、先人たちの過去の研究に学び、それらの先行研究では検討されなかった観点到に注目し、新しい結果を導くために必死で頑張った経験は、どの研究にも共通することではないでしょうか。

先行研究を学ぶ部分は、その研究分野において既に知られていること、いわば「常識」を身につけるプロセスに相当します。先行研究を踏まえて導かれた新しい結果は、やがてその分野において受け入れられ、当たり前となり、それまでの常識を置き換えた「新しい常識」となっていきます。このように、既に知られている「常識」から、今はまだ発見されていない「未来の常識」を開拓するフロンティアというのが、過去から連綿と続く人類の研究活動の本質ではないかと考えます。

私たちは今後、引き続き研究に邁進する人、産業界に進む人等、各人が活躍の場を移すこととなります。先に述べた、現在の常識を学び未来の常識を生み出すことは、どのような進路においても必要とされる創造力につながるものであり、本学での研究活動の経験から得られた財産を、今後の人生に活かしていきたいと思います。

現在の日本は、少子高齢化、財政・経済と雇用の問題、そして東日本大震災と原発事故の問題に代表されるとおり、多くの困難を抱えた時代に直面しています。将来を悲観にとらえて閉塞感が漂っているとも言われており、そのような見方が今の日本における「常識」なのかもしれません。しかし、私たち一人一人が現状を認識し、自分のなすべきことを見定め、目標に向かって努力していけば、難しい問題に対しても今までの常識を覆すような解決策を見出し、よりよい未来のための「新しい常識」を打ち立てることにつながると、信じてやみません。

最後になりましたが、今日を迎えることができたのは、これまで私たちをご指導くださいました諸先生方、職員の皆様、日々切磋琢磨した友人たち、そして温かく見守ってくださったご家族の皆様の支えがあったからこそです。今までお世話になった皆様に、心より感謝を申し上げます。

東京大学の更なるご発展を祈念いたしまして、答辞とさせていただきます。



平成26年度入学式・大学院入学式



平成26年度学部入学式及び大学院入学式が、4月11日（金）に日本武道館において挙行されました。午前の学部入学式には約3,100名の新入生とご家族など約5,500名、合わせて約8,600名が、午後の大学院入学式には、約2,800名の新入生とご家族など約3,300名、合わせて約6,100名が出席しました。

午前9時50分、運動会応援部による演舞があり、音学部管弦楽団によるミハイル・グリンカ作曲の「ルスランとリュドミラ序曲」及びワーグナー作曲の「ニュルンベルクのマイスタージンガー前奏曲」の演奏後、濱田純一総長はじめ理事・副学長、理事、学部長、研究科長、研究所長並びに来賓の小和田恆国際司法裁判所前所長が登壇し、10時40分開式となりました。

式では、はじめに音楽部管弦楽団、音楽部合唱団コールアカデミー、音楽部女声合唱団コーロ・レティツィアによる、東京大学の歌「大空と」の奏楽、合唱の後、総長が式辞を述べ、続いて、石井洋二郎教養学部長が式辞を述べました。式辞の後、小和田恆国際司法裁判所前所長から祝辞をいただきました。その後、入学生総代中西友梨奈さん（文科Ⅰ類）

による宣誓が行われました。最後に運動会応援部のリードにより新入生をまじえ全員で東京大学の歌「ただ一つ」の奏楽、合唱をもって、12時10分に式を終えました。

大学院入学式においては、13時25分から運動会応援部による演舞、音学部管弦楽団によるミハイル・グリンカ作曲の「ルスランとリュドミラ序曲」及びワーグナー作曲の「ニュルンベルクのマイスタージンガー前奏曲」の演奏後、濱田純一総長はじめ理事・副学長、理事、研究科長、研究所長並びに来賓の汪婉駐日中国大使夫人が登壇し、14時20分開式となりました。

式では、音楽部管弦楽団、音楽部合唱団コールアカデミー、音楽部女声合唱団コーロ・レティツィアによる、東京大学の歌「大空と」の奏楽、合唱の後、総長が式辞を述べ、続いて、城山英明公共政策学教育部長が式辞を述べました。式辞の後、汪婉駐日中国大使夫人から祝辞をいただきました。その後、入学生総代鶴飼貴也さん（薬学系研究科）による宣誓が行われました。最後に運動会応援部のリードにより新入生をまじえ全員で東京大学の歌「ただ一つ」の奏楽、合唱をもって、15時45分に式を終えました。

東京大学運動会歌
「大空と」

作詞 北原白秋
作曲 山田耕筰

大空と澄みわたる淡青
巖たり我が旗 高く開かむ
仰げよ梢を 銀杏のこの道
繡輿の窮理 応じて更に
人格の陶冶 ここに薫る
栄光の学府
巍々たり赤門 我が赤門
高く開かむ



東京大学総長

濱田 純一

平成26年度入学式 総長式辞

皆さん、入学おめでとうございます。長い受験生活を経て今日ここに出席が叶った皆さんに、東京大学の教職員を代表して心よりお祝いを申し上げたいと思います。また、この場にはご家族の皆さまにも多数参加いただいています。この日に至るまで皆さんの厳しい受験勉強を支えて下さったご家族の皆さまにも、お慶びを申し上げます。この晴れの日を皆さまとともにお祝いさせていただけることを、まことに嬉しく思います。

今年度の学部入学生数は、3,158名です。うち外国人留学生は44名です。東京大学の入学試験は皆さんがよく知っているように、たくさんの知識をただ暗記するだけではパスできません。豊かな知識を基礎として、それを使いこなすことのできる力、つまり、文章や現象の本質を読み解く力、総合的かつ分析的な思考力、あるいは論理的な表現力などが、入学試験で試されています。それだけに、この試験を突破してきたことによって、皆さんは、東京大学の学生という身分を得たという形式にとどまらず、これからこの大学で人類の長い歴史を背負った学問の広く深い世界を探究していく資格を認められたという実質を、誇りとしてもらいたいと思います。

今年は、本郷キャンパスの図書館工事のために、恒例の三四郎池傍での掲示板での合格者番号の発表は行いませんでした。合格者番号を自分の目でたしかめたい、あるいは胸上げをしてもらいたかったと、残念だったかもしれません。その分、この場では、例年以上の思いを込めて、皆さんに「おめでとう」という言葉をお伝えしたいと思います。同時に、こうした機会に皆さんが、難しい入学試験に合格した時の感激にまさるような感動を、むしろきちんと卒業した時にこそ味わえるような成長を、大学生活の中で目指してくれば、それもまた素晴らしいことだろうと考えています。それはつまり、これまでの受験勉強以上の豊かな、あるいは時にはハードな学びの

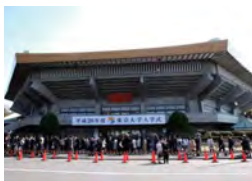
経験を、この大学にいる間に行ってもらいたいということです。

この場の全員に世界トップ水準の知的な総合力を

皆さんがいま具えている学力は、欧米の有力大学への新入生に比べて、決して遜色ないものであり、少なからぬ皆さんの力はそれを凌駕するほどのレベルのものです。ただ、卒業の時点になると力が逆転していくという話も聞きます。もっとも、これは、海外の大学との交流経験豊かな教員たちの実感ベースでの印象であって、何か明確な統計的証拠があるわけではありません。また、東京大学を卒業するかなりの人たちは、世界の有力大学の卒業生と比較しても高い水準の知的能力を習得しています。しかし、いずれにしても、グローバル化の時代といわれ、将来皆さんには世界のあちこちで思い切り活躍してもらわなければならない時代を迎えて、私は、学生の一部だけではなく、今日この場にいるすべての皆さんが世界トップ水準の知的な総合力を身に付けることができるように、教育を行いたいと考えています。

皆さんはこれまで、日々着実に成長を重ねてきました。たとえば、中学校に入ったばかりの頃の自分といまの自分とではずいぶん変わったと、皆さん自身が感じることもあるでしょうし、何より傍からずっと皆さんを見てきたご家族の皆さまが、その目覚ましい成長ぶりをよくご存じのことと思います。しかし、大学という場で、皆さんはさらに大きく変わるはずで、これまできほどでもなかった学生の力が、新しい学問の刺激に出会ってぐんと伸びるのはよくあることです。また、性格も入学時は内向的であった学生が卒業時にはずいぶんと積極的になるということも、よく見聞きします。大学では皆さんの能力も人格も、これまで以上に目覚ましい変化を遂げることが多いのです。

その理由は、大学では、知的にも社会的にも、これまでとは大きく違った環境があるからだと思います。知的な面で言えば、高校までは限られた範囲に枠づけられていた授業科



目の向こうに、とてつもなく広大な学問の世界が広がっていることを発見するはずです。そして、その学問の世界は、教科書に固定されたように静止しているのではなく、すさまじいスピードでさらに発展していることにも気づくでしょう。そうしたダイナミックな知の世界に身近に触れることによって、皆さんの知識の構造、論理の進め方、物事の見方や価値の捉え方などが大きく変化していくのは、自然なことです。

また、皆さんの世界は、社会的な意味でも大きく広がるはず。自分が住んでいたのとは異なった地域で生まれ育った人たち、自分とは違った能力や経験をもった人たちとの出会いの機会は、高校時代とは比べ物にならないはず。大学外での活動も広がることと思います。一言で言えば、一段と多様性を増した世界が、皆さんの周りに広がります。これまで自分が慣れ親しんできたものとは異なった環境、しかもそれぞれに素晴らしい能力を具えた人々に取り囲まれた環境の中で日々を送ることは、間違いなく自分を成長させてくれるものです。そのような変化が起こるのだということを意識し、その変化を楽しむということが、まさしく大学での生活の醍醐味です。東京大学という恵まれた環境を最大限に生かすために、皆さんには、大学での知的な生活、社会的な生活に、積極的・能動的にかかわってってもらいたいと願っています。

東京大学という環境の中に「自己投企」をしてみよう

こうした期待を述べるときにしばしば使われるのは、主体性を持つ、という言葉です。私もたしかに使うことがあるのですが、ただ、私は実は、主体性という用語は何となく綺麗な言葉にすぎる印象があって、あまり好きではありません。自分の主体とは何であるのかまだ迷っている人たちに、また、まだまだこれから主体の中身を作っていくことが求められている人たちに、主体性という言葉の当然の前提として期待を述べることに、いささか躊躇を感じます。自ら物事に積極的・能動的



にかかわることが求められる時に、主体性という言葉でなければどんな言葉があるだろうかと考えて、私に思い浮かぶのは、少し固い言葉ですが、「自己投企」という哲学用語です。これは、私が大学に入って間もなくの頃に耳にして以来、いまでも印象深く覚えているのですが、たしかドイツの哲学者であるマルティン・ハイデッガーからフランスの哲学者であるジャン＝ポール・サルトルにつながる実存の哲学の流れの中で使われた言葉だったと思います。この概念の厳密な哲学的な議論や当時の時代状況の下での政治的・社会的文脈などはさておき、私がそれをいまも記憶しているのは、これまでの自分というものに囚われず、まだはっきり見えていない未来の可能性の中に自分を投げ込む、そこで思い切りもがいてみることによってこそ自分というものが形成されてくる、というニュアンスを、この言葉から直感的に感じ取ったためであると思います。皆さんには、これまでの受験勉強の時代に別れを告げて、大学という知的な新しい世界に思い切り自分を投げ込んでほしい、そこから改めて大きな成長を遂げてほしいという願いを込めて、東京大学という環境の中に「自己投企」を、という言い方で、皆さんへの期待をあらわしたいと思います。

もちろん、皆さんにこのような期待をし、こうした呼びかけをする以上は、大学の側としても皆さんの「自己投企」が意味あるものとなるように、態勢を整えなければなりません。いま東京大学の学部課程で総合的な教育改革をすすめている理由は、まさにそこにあります。

平成27年度、つまり来年度からの本格実施を目指して進めている教育改革の全体像については、先ほど皆さんに配布したパンフレットを後ほどじっくり見ていただければと思います。皆さんも来年度から、その枠組みの流れに則って教育を受けることになりますが、そこで目標とされているのは、教育の国際化であり、教育の実質化であり、教育の高度化ということです。国際化をさらに大きく進めるために4ターム制をとって、海外の主な大学と授業期間や休暇期間のサイクル



応用化学科に進んで、高分子やエネルギーや生分解性プラスチックの研究がしたいなと思っています。課外活動では、ヨット部に興味がありますが……考え中です。(小林由尚さん／理I)

を出来るだけ調和させる、そして、さまざまな国際交流プログラムや奨学金を拡充することによって、皆さんが東京大学の中だけでなく、世界を動き回り、新鮮な知識や異なった考え方・価値観、あるいは違った生き方などに触れて、自分の中に眠っているかもしれないあらゆる可能性を試し、伸ばしてもらいたいと考えています。「グローバル・キャンパス」という言葉を東京大学では目標としてしばしば使ってきましたが、これは、海外からさらに多くの留学生を受け入れてキャンパスをいっそう国際性豊かなものとしていくという意味であると同時に、学生の皆さんがどんどん海外に出ていくことによって、世界中の大学のキャンパスを、あるいは世界のさまざまな場を、自分たちの学習の場としていくという状況をも目的としたコンセプトです。

言うまでもなく、学生生活の基本は、教室という場です。私たちは、そこで提供されている授業の内容が世界トップ水準のものであることに、自信と誇りをもっています。このたびの教育改革で行っているのは、そうした内容をより効果的に、さらに実質的に皆さんの血とし肉としてもらうために、さらにどのような工夫が可能かという取り組みです。双方向性の高い授業、少人数のチュートリアル的な授業、アクティブラーニングの強化、さらに習熟度別の授業、教養教育と専門教育との有機的な結合、分野横断型のカリキュラムの拡充など、構想されているメニューは実に豊富です。東京大学では定期的に「学生生活実態調査」という学生へのアンケート調査を行っていますが、2012年に行った調査では、「現在のカリキュラムに満足していますか」という問いに対して、満足している・まあ満足している、という答えを合わせると60%くらいになっています。これは必ずしも悪くない数字ですが、他方で、大学への要望で一番多いのが授業の工夫や改善に対するものであり、改善をととても期待する・期待するを合わせると75%に上っています。このたびの教育改革を通じて、こうした学生の皆さんの要望に応えながら、東京大学が研究で世界トップの水準であると同様、教育でも世界トッ



入学生 VOICE
哲学、論理学に関心があり、文転という選択肢も視野に入れています。入学式ではいろいろな話を聞けましたが、自分なりの考えを持つことが大事だなと感じました。(大石和志さん/理I)

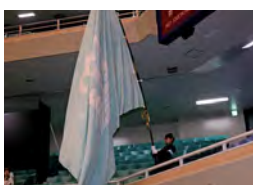
プの水準であることを実現したいと考えています。そうした取り組みを基盤として、私がこれまで学生の皆さんに繰り返し呼びかけてきたように、「よりグローバルに、よりタフに」という東大生の姿が着実に実現されていくものと期待しています。

教育改革を受動的に待っているだけでは変わらない

ただ、ここでもう一度強調しておきたいのは、こうした改革は、学生の皆さん自身がそれに積極的・能動的にかかわり、自分の力を伸ばすために仕組みを十二分に活用していこうという姿勢がない限り実を結ばない、ということです。皆さんが大学の今の改革の取り組みを口を開けて待っているだけでは、状況はこれまでと大きく変わることはないでしょう。であるからこそ、皆さんに、このいまの東京大学の動きに積極的にかかわっていく、「自己投企」を求めたいと思うのです。

皆さんの先輩の中には、すでにいまの教育環境を最大限に活用して、自分の才能を花開かせている人たちが、たくさんいます。例えば、東京大学には学生表彰という仕組みがあって、毎年、「学業、課外活動、社会活動等において特に顕著な業績を挙げ、他の学生の範となり、本学の名誉を高めた」学生を表彰するということが行われています。そして、そのなかでも「極めて顕著な業績」と認められたものについては、「総長大賞」が与えられます。学業の場合は、成績だけではなく学術的な高い成果なども求められますので、通常は大学院生にこの大賞は授与されてきました。しかし、昨年度は、学部での研究論文が国際的な科学雑誌に掲載されるなど高い評価を受けたとして学部4年生の2人の学生が、この総長大賞を受けています。いまここにいる皆さんも、わずか数年もすればこうした成果をあげられるまでに成長するということであり、そうした可能性を大いに楽しみにさせていただきたいと思います。

また、教育改革の中ですでにスタートしている取り組みの一つとして、初年次長期自主活動プログラム、いわゆるFLYプログラムとい





※式典翌日の4月12日（土）に神宮球場で行われた東京六大学野球春季リーグ開幕戦（対明治大学）の応援席には、宣言通り濱田総長が登場。入学式での言及と当日の応援に対して、応援部の江崎主将から感謝と感激の言葉が大声で述べられました。



数理の研究をやりたいのと、あとは吹奏楽部に入ってサックスを吹きたいです。入学式では、国際化とグローバル化の違いを指摘した小和田さんの話が印象的でした。（志村智之さん／理Ⅰ）

うものがあります。これは、入学直後から1年間特別休学をして国内外でボランティア活動や就業体験活動、国際交流活動などを行って自分を成長させていく自己教育の仕組みです。昨年4月から11名の学生がこの制度を利用して活動してきましたが、その成果レポートが最近出てきています。そのレポートを読んで私も感動しましたので、ほんの一節だけですが紹介させていただこうと思います。

「この一年様々な国を訪れてみて、日本での当たり前が当たり前ではない、むしろ正反對のことが当たり前とされている世界のあることを知った。そのことから、唯一絶対の『正しい』価値観など存在せず、真実は無数にあると考えるに至った。この気づきは様々な点で自分の変革を促したが、それは一度日本の当たり前の日常を離れてみなければなかったと思う。」と言っています。そして、そこから「自分の変革」の一つとして、「他者を否定しない」という学びを得た、ということにも触れています。

また、「以前私は失敗することを恐れ、決して失敗ないように生きてきた結果、勉強以外の活動にあまり積極的になれなかった。しかし社会に出て自分のしたいことを実現させていく中で失敗や他者からの批判は必ずつきものであり、それを恐れていては何も始まらないことを知った」、ともレポートしています。

このFLYプログラムに限らず、いま東京大学では、いろいろな形、さまざまなタイミングで、社会的あるいは国際的な体験活動に皆さんが参加出来る機会を充実させています。皆さんが知識というものを頭だけでなく実感として肌身で学んでいくために、こうした機会も効果的に活用してもらえればと思います。

知的な力を実際に生かす 社会的な力も鍛えよう

大学というのは狭い意味での勉強をするだ

けの場ではありません。私は「知的な総合力」という言葉を使うことがありますが、高い水準の知的な力を鍛えるとともに、それを実際に生かしていく、高い水準の社会的な力をも鍛えてもらいたいと考えています。それらを併せて、皆さんが将来、大学で研究者としての道を歩むのであれ、社会のどのような現場で活動するのであれ、人々の中でつねに先頭に立って活躍が出来るような「知的な総合力」を育んでもらいたいと思います。そのために、ある時は、一人で夢中で勉学の世界にのめり込むことも必要ですし、またある時は、仲間や他の人々と一緒に、社会の多様な広がりを経験するといったこともして下さい。

たまたま明日から春の東京六大学野球が神宮球場で始まります。開幕戦に東京大学の試合がありますので、私も応援にいくつもり*ですが、球場に行くと、野球部員の学生たちの活躍はもちろん、後ほど、今日の式典の最後に皆さんにエールを送ってくれる予定の応援部の学生たちの元気一杯の応援ぶりなど、日頃はあまり目にしない、東京大学の姿、学生仲間の魅力を感じることが出来ます。ぜひ皆さんにも在学中、運動会のさまざまな部の試合の競技に参加する人も多いでしょうが、また応援に出かけるといった機会も作ってもらいたいと思います。

こうしたこともすべて含めて、この東京大学は、皆さんが持っているさまざまな可能性を大きく成長させていく宝庫です。そうした可能性の大海に「自己投企」をして、これまでの自分というものに囚われず皆さんの力を鍛え上げてほしいと思います。そして、全力を尽くして卒業の日を迎える時に、いま現在の入学の喜びにもまさる、一杯の充実感や達成感、深い感動を味わってもらいたいと願っています。これからの皆さんの実り多い大学生活を心から祈って、式辞とします。

〈平成26年(2014年)4月11日〉

教養学部長式辞

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。また、ご家族の皆様方にも、心よりお祝い申し上げます。

教養学部の教職員を代表いたしまして、ひとこと歓迎のご挨拶を申し上げます。

皆さんはこれから、駒場キャンパスで最初の二年間を過ごすわけですが、そこではしばしば、「リベラルアーツ」という言葉を目にしたり耳にしたりする機会があると思います。これは従来、「専門に偏らない幅広い教養」、すなわち、いわゆる「一般教養」という意味で了解され、教養学部の基本的な教育理念として、長年受け継がれてきました。

しかしながら、リベラルアーツとは、単なる一般教養の同義語ではありません。これはラテン語の artes liberales（アルテス・リベラレス）が英語に訳されたものですが、その考え方の淵源は古代ギリシアにまでさかのぼり、本来は「人を自由にする学問」を意味します。つまり「リベラル」という形容詞には「自由にする」、「解放する」という動詞的な意味がこめられているわけですが、このことはこれまであまり強調されてきませんでした。

現代人はすでに自由ではないか、だから別に解放される必要などないではないか、と思われるかもしれません。しかし、普段意識することはなくても、人間は多かれ少なかれ、さまざまな限界に囲い込まれた不自由な存在です。

では具体的に、どのような限界が存在しているのでしょうか。

第一に挙げられるのは、当然ながら「知識の限界」です。皆さんはこれまでもずいぶん多くのことを学んできたと思いますが、大学での学びに必要とされる知識は、質量ともに、高校までのそれとは比較になりません。それぞれの専門分野が前提としている基礎知識は、文系理系を問わず膨大なものですし、外国語に関しても、グローバル化時代を生き抜くためには、英語を含めた複数の言語を自由に使いこなす能力が要求されます。

また、そもそも世の中にはいったいどんな学問分野があるのか、そこではどんな研究がおこなわれているのか、という全体的な見取り図を獲得することも必要です。どんなに高度な専門知識であっても、広い展望のなかにはかるべく位置づけられるのでなければ、ただの無意味な断片にとどまってしまうからです。

このように無限とも思える学問の広がりや前にしてみれば、自分がまだほとんど無知に等しい不自由な状態であることを、誰もが痛感せずにはいられないでしょう。ですから大学ではまず飛躍的に視野を広げ、多様なフィールドで「知識の限界」を乗り越えるべく努力しなければなりません。それこそが、リベラルアーツの出発点です。

第二に挙げなければならないのは、「経験の限界」です。皆さんの多くは、これまでの時間の大半を家族や友人たちと過ごしてきたのではないかと思います。そのぶん、異なる価値観に触れる機会は乏しかったのではないのでしょうか。

また、中には海外経験のある人も相当数おられると思いますが、まだ日本から一歩も出たことがない人も少なくないでしょう。世界にはどんな国や地域があるのか、そこにはどんな人々がいて、どんな言葉をしゃべり、どんなことを考え、どんなものを食べ、どんな生活をしているのか、そうしたことを知らずにいたのでは、異文化理解も深まりようがありませんし、他者とともに生きることの喜びや苦しみを実感することもできません。

東京大学では昨年度から「初年次長期自主活動プログラム」、通称 FLY プログラムが始まり、一年目は 11 名の新入生たちが特別休学制度を利用して、世界の各地で、あるいは東北の被災地で、思い思いの活動をしてきました。

彼らは自分と同じような境遇の人々に囲まれて安住する心地よさからいったん離れ、まったく異なる環境に身を置くことをあえて択んだわけですが、それぞれの行く先で未知の文化や風習との出会いに驚き、時にはショックを受けながらも、ずいぶん多くのこ



東京大学教養学部長

石井 洋二郎



式で面白かったのは石井先生の思考の限界の話。東大では、医者として必要な知識と、体力をつけたいです。水泳部に入って個人メドレー一種目でがんばるつもりです。(隅野幹彦さん／理Ⅲ)



とを学んだようです。これはまさに「経験の限界」から自らを解放とうとする果敢な試みであり、リベラルアーツを実践する場が教室だけではないということを、みごとに証明してくれた例だと思います。

ところで、「知識」も「経験」も、意欲をもって努力さえすればいくらでも拡大することができますが、私たちを拘束している第三の限界は、必ずしも量的な努力によっては越えることができないもの、それだけに、おそらく最も克服することのむずかしいものです。すなわち、「思考の限界」がそれです。

思考は基本的に言語によって営まれますが、言語とはもちろん自分だけの所有物ではなく、ある共同体の共有物です。そのため、いったいどこまでが自分の言葉であるのか、どこからが他人の言葉であるのかという境界線は、どうしても曖昧にならざるをえません。

ということは、どこまでが自分の考えたことで、どこからが他人の考えたことであるかという境界線も、やはり曖昧であるということです。したがって、いかに創造性豊かな人間であっても、百パーセント「自分の言葉」だけで純粋に「自分の思考」と呼べるものを織り上げることは、不可能であると言わねばなりません。

その結果、私たちはともすると、他人の考えたことをあたかも自分自身の発想であるかのように錯覚したり、場合によっては他人の言葉をそのまま写し取ってしまったりする危険があります。

昨今、学術論文におけるコピー&ペーストの問題が新聞報道などでもクローズアップされていますが、意図的な引き写しは明らかに不正行為ですから論外としても、厄介なのは、そうとは自覚せず他者の言葉を反復してしまうこと、すなわち「無意識のコピー&ペースト」が、目に見えない形で私たちの思考を侵食しているということではないでしょうか。

じっさい、自分ではオリジナルなことを言っているつもりでも、じつはこれまで誰かによってすでに言われてきたことを焼き直しているにすぎない、といったことは往々にし

てあるものです。自分の頭で主体的にもの考えているはずなのに、いつのまにか出来合いの図式をなぞってしまう—私たちの思考を不自由にするこの惰性的なメカニズムに絡めとられないためには、いったいどうすればいいのでしょうか。

いささか逆説的に聞こえるかもしれませんが、他者の思考の模倣に陥らないためには、まずその中にどっぷり身を浸してみることが必要です。そしてその最も有効な手段は、ひたすら本を読むこと、これに尽きると私は思います。書物という言葉の海に全身で飛び込み、必死にもがきながら自力で泳ぎ渡ることによって、はじめて人は自分だけの言葉を鍛え上げ、自分だけの思考を紡ぎ出すことができるからです。

最近の調査結果によれば、まったく本を読まない大学生の割合がはじめて4割を越えたそうです。一日の平均読書時間も、わずか26.9分と報告されていました。これらの数字は複数の大学の平均ですから、まさか東大生にはあてはまらないと思いますが、さて、皆さんはいかがでしょう。

読書量の減少はスマートフォンの普及と連動している、という説もあります。時代とともに生活形態が変化するのは当然ですし、そこから新しい文化が生まれていくことも事実ですから、この傾向についてとやかく言うつもりはありませんが、その一方で皆さんが書物から遠ざかり、他者の言葉と粘り強く格闘する機会を失い、その結果「思考の限界」から抜け出せなくなっているとすれば、やはり問題でしょう。

現にいまこうして私が話している間にも、手元でスマホを操作して、ツイッターにメッセージを流している人がいるかもしれません。いまだにガラパゴス携帯を手放せない身としては、その器用さに軽い嫉妬を覚えつつ、ただ感心するほかないのですが、刹那的に生産され、瞬時に流通していく定型的な記号の群れが、加速度的に「無意識のコピー&ペースト」を増殖させ、思考の主体性を麻痺させてしまう恐れはないのかと、いささか心配になるのも正直なところでは



式の話聴いて、改めて卒業までには留学したいという思いを強くしました。高校ではテニス部でしたが、大学では経験者が少ない新しい競技に挑戦するつもりです。(伊藤涼さん／理I)

スマートフォンの画面を見る時間のすべてとはいわないまでも、せめて半分くらいは読書のために割いてほしいと願うのは、アナログ人間の時代錯誤的な郷愁にすぎないのでしょうか。

言うまでもなく、ここで私が言っている読書とは、単に知識を増やすためのものではありません。確かに本を読めば読むほど知識の量は増えるでしょうが、それよりもむしろ、自分と異なる価値観や世界観と正面から向き合い、真剣に対峙することを通して、自らを相対化することこそが重要なのです。

ですから場合によっては、一冊の書物と出会うことで、知っていたはずのことが疑わしくなったり、わかっていたはずのことがわからなくなったりすることもあるでしょう。それまでまったく触れたことのない言葉に触れて、火傷するような痛みを覚えたり、自分が崩れるような感覚に襲われたりすることもあるかもしれません。

まさにそのときこそ、自分は「思考の限界」から解放されるチャンスを手に入れているのだと思ってください。それはまた、言葉本来の意味における「教養」が、皆さんの中に萌しつつあることのしるしでもあります。なぜなら、教養とは足し算によってただ蓄積されるだけではなく、時には「引き算」によって、あるいは「割り算」によって、絶えず問い直され、解体され、そして再構築されるべきものであるからです。

祝辞

みなさん。今日は、本当におめでとうございます。

みなさんは、研鑽の甲斐あって今日こうして自分の目指した大学での新しい一步を踏み出そうとしておられます。今みなさんそれぞれの心の中には、希望に満ちた将来への夢と無限の可能性への期待とが広がっていることでありましょう。孔子はその晩年、一生を顧みて「吾十有五にして学に志す」と申しまし

いま、ここにある自分に充足し固着してしまおうのではなく、ここにはない自分、どこかにあるかもしれないけれどもまだ見つからない自分に向けて精神を開くこと、そしてやや大げさな言い方をすれば、自らの存在そのものを根底から揺り動かし、突き崩し、組み替え続けること、それこそが「教養」の本来的べき姿であり、人間を自由にする「リベラルアーツ」の本質にほかなりません。

ですから皆さんには、教養学部での学びを通して、ただ多くの知識を所有しているというだけの、座して動かない「知識人」ではなく、いくつもの壁を突き破りながら自らを不断更新していく、自由で軽やかな「教養人」になることを目指してほしいと思います。

以上、知識、経験、そして思考という三つの視点から、思うところを述べさせていただきました。もちろん、長い人生の中で、乗り越えるべき限界はこれ以外にもまだまだ数多く存在します。その意味で、リベラルアーツとは生涯にわたって継続される、終わりのなき自己解放の運動であると言ってもいいでしょう。

しなやかな知性と若々しい感性に恵まれた皆さんが、駒場キャンパスでその第一歩を踏み出し、新しい友人たちと切磋琢磨してめざましい成長をとげ、やがては名実ともに日本の、さらには世界のリーダーへと飛躍してくださることを願いつつ、私の式辞を終えたいと思います。

た。みなさんもまた、ちょうど同じような年齢で、今この東京大学という最高学府で本当の学問というものに志をたて、思索に没頭する機会を与えられたのです。ここで過ごす何年間の青春の時は二度と帰ることはありません。それは、みなさんのこれからの人生の基礎を造る上でかけがえのない貴重な時間なのだということを心に刻んで、悔いのない一日、一日を送っていただきたいと思います。

同時に、今日のこの日は、みなさんにとって大学生としての第一歩であるだけでなく、新しい人生への第一歩でもあります。みなさ



入学生 VOICE
勉学ではどの分野に進むか決めていません。まずはテニスのサークルに入って交友を広げたいです。式では国際化とグローバル化の違いの話が頭に残りました。
(五十嵐光秋さん/理I)



国際司法裁判所前所長・
裁判官

小和田 恆 さん

んのほとんどの人は、もう直ぐ成人を迎えられるはずです。成人（coming of age）とは、一人前の大人として社会の一員となることを意味します。ご両親の暖かい庇護の下でここまで育てていただいた雛鷺が、一羽の大鷺となって大空に飛び立つ日が来たのです。これから自分自身で切り拓いて行く新しい人生は自分にとってどうあるべきかということ、言い換えれば、「人は何のために生きるのか」ということを、みなさんのこれからの人生の課題として問い続けていってほしいと心から願うものです。

我々は、今日いまだかつて経験したことの無いような激動の時代に生きています。それは、「グローバル化」という未曾有の地殻変動が世界を襲い、これまでの国際システムを揺るがせているからです。特にわずか150年前に開国という激動を通過してきたばかりのわが国にとっては、この大変動にどう立ち向かっていくのかという問題は、国の将来を左右しかねない最大の課題を投げかけているように思われます。「グローバルに活躍できる人材の育成」ということが昨今合言葉のように叫ばれているのも、そのような危機意識の現われともいえましょう。

私は、そういう考え方自体に反対なわけではありません。しかし、「グローバルに活躍できる人材」とは、いったいどういうことを意味しているのかについて、もう一度深く考えてみる必要があるのではないかと思います。

比較的最近まで、わが国では「国際化」という言葉が流行していました。今日「グローバル化」と呼ばれる状況と、かつて「国際化」といわれた状況とは同じことなのでしょうか。人によっては、この二つの概念は同じものだという人もあります。私は、「国際化」ということと「グローバル化」ということとは互いに似通った概念ではあるけれども、両者の間には質的な相違があると考えています。国際化（Internationalization）というのは、文字通り、国際関係つまり国と国との関係が緊密化することを指しています。19世紀半ばに、それまで200年余りにわたって鎖国政策を採り続け、国際関係というものにほと

んど無縁であった日本が開国を求められたとき直面したのは、まさしくこの「国際化」という問題だったのです。明治政府は、この問題を国と国とが接触する接点となる場所をポイントとして抑え、そこを重点的に国際化の手段とすることによって乗り切ることを図ったということが出来るでしょう。（たとえば、政治面でいえば外務省、経済面でいえば関税制度。学術文化面でいえば翻訳文化、さらにそれらを総合的に象徴するものとしての鹿鳴館体制などが、そういう接点としてのコンタクト・ポイントの役を果たしたといえます。）

それは、ちょうど物理学で100Vで機能する回路と200Vで機能する回路という電圧の異なる二つの閉鎖回路を接続させるために、両回路の接点に変圧器を入れて両システム間の調整をはかるのと同じ手法と見ることが出来ます。

ところが、グローバル化（Globalization）と呼ばれる現象は、世界が一体となって一つの社会が生まれることを意味します。そこでは、それぞれの社会が国境で仕切られていた状況に代わって、異なった社会同士が国境を超えて直接に面と面でびったり接触しあうという状況、さらに究極的には面としての接触すらも消滅して、グローバルに広がったひとつの社会の中で交流が行われ、競争が展開されるという状況が生まれます。それがグローバル化という現象なのです。

そういう状況においては、「グローバルに活躍できる人材」という特別なカテゴリーの人間を育成するという、いわば「ハウ・ツーもの」的お手軽アプローチでは対応することは出来ません。「学問に王道なし」という言葉があります。王様だけに許される学問の近道がないように、グローバル化という世界を覆う滔々たる流れに対抗してその中を生き抜いていくために必要なのは、我々一人一人が実力をつけることなのです。

長い歴史を通じて、日本という島国は、外敵に侵されることもなく、独自のきわめて均質的な社会を作り上げてきました。その中でもっとも重要な美德とされてきたのは、「和をもって貴しと為す」（聖徳太子十六条憲法）



↑今回の式典では、「ただ一つ」の合唱に際して運動会応援部がステージに登壇、会場の参加者を力強くリードしました。

東京大学応援歌
「ただ一つ」

作詞 大森幸夫
作曲 山口琢磨

ただ一つ 旗かげ高し
いまがやける 深空の光
天龍を 負える子ら
友よ 友
こなる丘に 東大の旗立てり
伝統の旗 東大の光
たたえ たたえん
たたえ たたえん

ただ一つ 歌こえ高し
いまなりわたる 疾風の力
双眼の 澄める子ら
友よ 友
こなる杜に 東大の歌湧けり
伝統の歌 東大の力
たたえ たたえん
たたえ たたえん



素粒子研究に興味があります。第二外国語はスペイン語。入学式の話聴いて欧州に留学したいと思いました。テニスカダンスか放送関係のサークルを検討中です。(安藤結衣さん／理Ⅱ)

という考え方でありました。それは、他に類を見ないような素晴らしい社会道德の原理であるといえます。しかし、異なった価値意識、多様な文明観が入り交う今日の国際社会の中では、「和」は自ずから生まれるものではなく、社会を作っている多様な人々を説得することによって、初めて実現するものなのです。

私は、今から半世紀以上も前に、この大学を卒業して直ちに英国ケンブリッジ大学に四年間留学する機会に恵まれました。そこには、日本が第二次世界大戦の敗戦に打ちひしがれていた時期に私が学んだ東京大学からは想像も出来ないような、真理の探求と人間の育成を目指す大学の姿がありました。東京大学に入学後、大学というものに失望と幻滅を感じていた私にとって、このことは「大学とはこんなに素晴らしいところだったのか」と感嘆させられる強烈な体験でした。今日の東京大学は、濱田総長以下諸先生方のご努力で面目を一新しています。決して新入学のみなさんを失望させるようなことはありえないと私は確信しております。それにもかかわらず、私がみなさんにこの私の経験をお話するのは、外国の大学に留学する経験がいかに大切なことかを私自身が身を持って痛感したからであります。

外国留学から得られるものには、いろいろな側面があります。私が外国留学を強くお勧めするのは、それが外国語習得の近道だからというような功利的な理由からではありません。もちろん外国語を身につけることが重要であることは、後でも触れるように、グローバルな環境の中で仕事をしていく上で当然なことです。しかし、私自身の体験からみて、外国で、しかも大学で、生活を送ることが一番大切だと考えるのは、それがみなさんに「他流試合」の機会を提供するからに他なりません。徳川時代の武士にとって一番大切なことは、いざというときに備えて、武芸、中でも、剣術の腕を磨くことでした。当時日本の国内には大名お抱えの多くの剣道師範があり、それぞれに道場を開いて剣術指南をしておりました。これらには、それぞれ流派があり、柳生新陰流だとか、宮本二天一流だとかいうように、異なった刀さばきで剣を教えて

いたという伝統があります。当然のことながら、同じ師匠から同じ流派の剣さばきを教わっている限り、いくら腕が上がり免許皆伝を受けても、流派の異なる剣士と戦うときには勝手が違うことがあります。他流試合とは、そういう異なった流派の道場を訪れて試合をすることによって、自分の腕を磨くことをいうのです。

私の専門分野は国際法です。ケンブリッジ大学で国際法の研究をするようになって一番驚いたことの一つは、同じ国際法でありながら私が日本で勉強してきたこととケンブリッジで学んだことの違いがあまりに大きいことでした。それは、単に知識の具体的内容がどうこうという問題ではありません。学問的にいえば、それは、問題に取り組む方法論、さらにはその背景となるものの考え方、論理の進め方というようなことに関わる問題だったのです。他流試合は、そういう異なった文化との直接の接触、対話を通じて、グローバルな世界における異文化との対峙の仕方を教えてくれるのです。

異なった文化環境に身をおくことによって、それまで自分が当然と思っていた自国の文化が実は自国の歴史的、地理的環境から生まれたものという面を持っているのだということに気づかされるのです。さらにもっと大切なことに、外国の大学で学生仲間や先生方などの人たちと議論する機会をもつことによって、今まで自分でも気が付かなかった自分の社会や文化が備えている美点について新しい再発見をするということも決して稀なことではありません。異文化を体験するということは、そういうことなのです。

みなさんは「常識」ということがどういうことかご存じだと思います。我々が常識という言葉で意味しているのは、多くの場合、英語でいえば“conventional wisdom”という言葉に当たるのではないかと思います。つまり、ある社会の中でみんなが当然そうだと習慣的に受け入れていることであって、よく吟味してみたときにそれが本当にそうなのかどうか、それが本当に「健全な判断」であり「良識 (good sense, bon sens)」に合致している



薬学部に進んで試薬開発がしたいです。陸上運動部に入って、高校時代に自分がマークした400mハードルの中国記録(59秒6)を更新するのも大きな目標です。(坪浦諒子さん／理Ⅱ)

のかどうかということとは別なことであることが多いのです。外国に出て、その国の社会の中で生活をするということは、そういう日ごろ常識だと考えていたことが、実は何の合理性の根拠ももたない、自分が生まれ育ってきた社会の中の習慣的な約束事に過ぎなかったのだということを悟られる経験の連続だということが出来るでしょう。そして、この感覚は、これからの世界の中で、異なった歴史的、文化的背景を持った社会の中で育ってきた人たちと一緒に議論をし、一緒に社会生活を送っていく上で極めて大切なことなのです。

日本には、昔から「出る杭は打たれる」という諺があります。それは、なるべく控えめに、目立たないように行動することが美德とされてきた日本の伝統的社会的知恵と見ることも出来るでしょう。和の精神を大切に、穏和で波風の立たない社会を理想にしてきた伝統社会では、個性的であることは悪徳とさえみなされてきたということが出来るかもしれません。しかし、それは、同時に現状を改革しようとする意欲の芽を摘んでしまうことになりかねないという面も持っています。米国の大学では「出る杭」にならないように発言を控えていたら、クラスで完全に無視されてしまいます。グローバルな場で競争していかなければならない今日の国際環境の中で日本が他国に遅れをとりかねない状況も、そういうところから生まれていると見ることも出来ます。

世界の中で、異なった文化的、歴史的背景を持った生活環境の中で育ってきた人たちと一緒に生活し、ただ仲良く付き合うだけでなく場合によっては互角に戦わなければならないという今日の国際社会において役に立つ存在と評価されるためには、自分の個性がはっきりと確立しており、自分の主張で周りを説得する力を持つことがますます重要になっていくでしょう。そういう説得の力を身につけることを可能にするのは、広い体験と深い思索に基づいた自己の鍛錬と、それを通じて備わってくる人格と教養の力だと思います。教養というのは、単なる該博な知識の集積ではありません。自分自身の直接体験だけでなく、読書という間接体験を通じて、物事の本質を

見抜く洞察力と判断力を身につけた人こそ、真の教養ある人というにふさわしいのです。相手を説得できるためには、言葉が決定的な重要性を持つことは、いうまでもありません。自分の考えていることを相手に的確に伝えることは、相互理解の第一歩だからです。しかし、それには、伝えるべき内容が十分に説得力を持つことが大前提となります。私は外国語習得の重要性をいささかも軽視するものではありませんが、より本質的に重要なのは言葉によって伝えようとする内容であり、そこに現れるその人の人格と教養の深さなのではないでしょうか。

今日の私の話の最初に、「新しい人生の第一歩を踏み出すみなさんには、“人は何のために生きるのか”ということを考えて生きてほしい」ということを申しました。この大学でこれから学ぼうとしているみなさんも、数年後には、社会人としての人生のスタートを切ることになります。研究者としての人生を目指す人もあるでしょう。企業に入って力を発揮する道を選ぶ人もあるかと思います。公務員として社会のために役立つ仕事をしたいと志す人もいるでしょう。みなさんがそれぞれの人生において、これまで自分が社会から受けてきた恩恵にどういう形でお返しをすることが出来るのかということを念頭において、大学生活を送っていただきたいと念じてやみません。

よく、今の若者たちは内向き志向だといわれます。私はそんなことはないと思います。むしろ、今日の混乱した世相の中で、「自分は何をしたらよいのか」と自分の理想を摸索する若者が多いのではないかと感じます。そういうみなさんには、三年前の東北大震災のときに日本の若い人たちが示したすばらしい同胞愛と社会連帯の行動が世界中の人々の賞賛を呼び起こしたことを思い出していただきたいのです。国際社会も、国内社会と同じように、ひとつの人間社会です。そこに住む人たちは、それぞれに個性を持ち、希望に燃える人間集団です。私は、60年にわたる自分自身の経験を通じて、世界各地でこういう人たちが東北大震災の災害にも劣らないような



式の話を書いて、国際化は国対国、グローバル化は個対個の話なのだと感じました。海外に出て視野を広げるとともに、学術と社会の仲介役になりたいと思います。(若林里咲さん／理Ⅱ)

紛争、難民、極度の貧困などの災害の中でがんばっている姿を目のあたりにしてきました。みなさんには、同胞愛と社会連帯の精神に立って、同じ地球社会に属するこの人たちのために何をすることができるだろうかというこ

とを考える姿勢を養っていただきたいと思うのです。そういう姿勢こそが、「グローバル化する世界の中で活躍できる日本人」を創っていくことになるのだと私は確信いたします。本日は、まことにおめでとうございます。

入学生総代宣誓

文科I類 中西 友梨奈さん

春の柔らかな日差しが降り注ぐ今日の佳き日に、平成26年度東京大学入学式に出席できることを、私たちは大変嬉しく思っております。

私たちは、大学受験という長く厳しい試練を乗り越え、東京大学で学ばせて頂けることとなりました。これから始まる二年間の教養課程では、後に進もうとしている後期専門課程の枠にとらわれることなく、強い意欲をもって可能な限り多くのことを学び、幅広い知識と柔軟な思考力を身につけたいと思います。また、学問の探求だけでなく、大学内外の活動にも積極的に取り組み、視野を広げて、自ら考え行動

できる主体性も養っていききたいと思います。一方で、価値観の異なる様々な人々が、日本や世界の各地から、東京大学に集まっているという、この素晴らしい出会いを大切にしたいと思います。その交流を通して得られる刺激を、進んで自らの成長の糧とし、そこで培ったものを、将来社会に還元できる人間になりたいと考えております。

しかしながら、私たち新入生は未熟な点ばかりです。これから切磋琢磨していく仲間たち、親身に相談にのってくださる先輩方、多大なるご指導を賜るであろう、濱田総長をは

じめとする東京大学の教職員の方々のお力なしには、私たちは、目標や夢の実現へ歩むことはできません。先生方、ご指導よろしくお願い申し上げます。そして、この場をお借りして、保護者の皆様をはじめ、今まで私たちを支えてきて下さった方々に感謝の気持ちを表したいと思います。ありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いいたします。期待にあふれる大学生活を私たちの手でより充実したものとしていくため、日々の努力を怠らず、精進していくことをここに誓って、新入生の挨拶とさせていただきます。



式に出て入学した実感が湧きました。大学で自分のやりたいことを見つけたいです。サークルはダンス系に入り、社会勉強のために接客のバイトをするつもりです。(柴戸未来さん/理I)

平成26年度大学院入学式 総長式辞

このたび東京大学の大学院に入学なさった皆さん、おめでとうございます。東京大学の教職員を代表して、心よりの歓迎とお祝いを申し上げます。言うまでもなくこの東京大学は、学術の幅広い分野において世界トップ水準の研究を行っている組織です。そうした研究から生まれてくる成果に、皆さんがこれまで以上に身近に接して知的な力を鍛えていくと同時に、そうした優れた研究成果を東京大学がこれからさらに生み出していくことが出来るよう、皆さんが貢献してくれることを大いに期待しています。大学院ではこれまで以上に、深い専門の世界に入り込んでいくことになります。そこでは皆さんは、これまでのように、先人が作った概念や論理や手法を学び、それらを使いこなせるようになるだけでなく、自分自身の概念や論理や手法を生み出

し、そこから学術の新しい発展を生み出していくことが出来るようになるはずです。大学院における皆さんの成長を楽しみにしています。

今日、この場には、皆さんの勉学を支えて下さっているご家族の皆さまも、多数ご出席になっています。皆さまにもお祝いを申し上げます。いまここにいる大学院生の皆さんは、これから研究の世界で、あるいは社会のさまざまな現場で、つねに知の最先端を目指し、人々の夢と豊かさを実現するために活躍するであろう人々たちです。時には学問の奥行きに深さにたじろぎつつも、精神的につねに自分自身とも闘いながら、人類の知のフロンティアを開拓すべく日夜努力を続ける人々たちです。このようなチャレンジを行おうとしている皆さんを、ぜひこれからも応援し、支え続けてあげていただければと思います。

今年の大学院への入学者は、4,509名です。その内訳は、修士課程が2,889名、博士課程が1,261名、専門職学位課程が359名です。うち留学生の数は444名で、入学者のおよそ



東京大学総長

濱田 純一

1割を占めていることになりましたが、留学生のみなさんには、自分が慣れ親しんだ地を遠く離れた場所で研究に携わることによって、新鮮な学問的刺激を受けるだけでなく、異なった生活や考え方、文化や価値観の違いなどを大いに楽しんでもらいたいと思います。日本人の学生の皆さんも留学生の皆さんといろいろな機会に交じり合って、さまざまな人々が持っている豊かな魅力に触れてほしいと思います。また、大学院に入学する人たちの中には、東京大学以外からの皆さんもたくさんいて、全体の4割くらいになります。新しく東京大学で学ぶ皆さんは、最初は慣れないことが多いかもしれませんが、積極的に行動して、これからの東京大学を担う主体となっていただきたいと思います。個人の成長にも学問の発展にも大切なのは多様性です。東京大学の大学院は、学部以上に多様な環境に恵まれています。東京大学の学部から進学してきた学生だけでなく、海外からの学生、そして東京大学以外の大学からの学生の皆さんも一緒にあって、それぞれの能力と持ち味を発揮しながらお互いに刺激しあうことで、新しい活力や創造力が生まれていくはずですよ。大学院ではそうした多様な人たちが切磋琢磨する環境を、思い切り楽しみ、自分の成長に生かして行って下さい。

いまここにいる皆さんの将来の計画、未来への思いはさまざまであろうと思います。研究者としての道を歩もうとしている人もいれば、より専門的な能力を身につけて社会に出て行こうとする人もいます。いずれにしても、これから大学院でより深く学問というものにかかわって行くにあたって、いくつか意識しておいてほしい研究姿勢というものがあります。昨今話題では、研究倫理ということもその大きな柱の一つです。それは決して他人ごとではなく、皆さん一人一人がこれから真剣に受け止めていかなければならないテーマです。東京大学では、この3月に、研究倫理の保持についてこれまで以上に緊張感をもちながら日々の研究を進めようと、『研究倫理アクションプラン』をまとめました。それは、今日いくつかの資料とあわせて皆さんの手元

に届いていることと思います。今後、このアクションプランを踏まえて、すべての学生に向けた研究倫理教育、研究者の研修、全学的な啓発活動、研究倫理推進室の設置、研究データの保存体制の整備などといった具体的な措置をとっていくことにしていますが、このプランのサブタイトルに付している言葉は、「高い研究倫理を東京大学の精神風土に」というものです。その意味するところは、研究倫理というものを皆さんが、時々注意して思い出すというよりは、身に染み付いたものとして、日々の研究活動の自然な一部としてほしいという強い思いです。そうした思いを、今日ここにいる皆さんとしっかり共有することができればと思います。

学問に携わるにあたって「勇気」を意識してほしい

この研究倫理と並んで、皆さんが学問に携わるにあたっての姿勢として意識しておいてもらいたい概念の一つに、「勇気」というものがあると私は考えています。

勇気というのは、戦いの世界、武の世界では、当然のように登場するテーマです。しかし、学問に携わる時に、勇気という言葉が出てくることには、皆さんは奇異な感じを受けるかもしれませんが、「文弱の徒」という表現もありました。つまり、学問や文学などをやっている者は肉体的にも精神的にも弱々しい存在である、といった意味の言葉です。しかし、すでに実際に勉学に励んできた皆さんは、文弱という言葉にはかなり違和感を持つのではないかと思います。真剣に研究テーマに向き合う人は、そこで求められる精神の緊張の厳しさを実感しているはずですよ。精神のたくましさがないと、難しい試験問題に取り組むことは出来ませんし、まして幾たびの失敗にもめげずに何度も実験を繰り返したり、言葉の一字一句を精選しながら文章をまとめ論理を積み上げていったりすることは出来ません。そこでは、文弱という言葉はまず当てはまりません。とはいえ、では、そこに勇気という言葉が馴染むかということ、やはりしっくりこ



私は高校が海外だったので、汪さんの話には特に共感できました。院では乗り物と人間のよりよい関係を探りたいと思っています。(舟見 幸一郎さん／新領域創成科学研究科人間環境学専攻)



式では総長の勇気の話が心に残りました。今後は生体内のパーツをゲルで代用するためのバイオマテリアルを研究する予定です。(林加織さん/工学系研究科バイオエンジニアリング専攻)

ない感じがあるだろうと思います。

勇気という言葉は実に多義的で、いろいろな意味合いがあります。これまでの人類の歴史の中で、もっとも多く論じられてきた言葉の一つではないかと思います。古くはギリシアの時代から、そうした議論がありました。例えばプラトンの対話編の中に『ラケス』というものがあります。ラケスというのはアテネの軍人の名前ですが、この人物にもう一人の軍人やソクラテスたちが絡んで、いつものがらの対話が進んでいくのですが、そこで子どもたちへの教育を論じる中で、「勇気とは何であるのか」というテーマに話が及びます。もっとも、ソクラテスの対話でしばしばあるように、この議論は結局は、アポリア、行き詰まり状態に陥っているようでもありますし、私も哲学の話はさほど得意ではありませんので、ここでは、ごく断片的な言葉を一つだけ拾っておきたいと思います。

私はこの本を、かつて私たちの人文科学の大学院で学ばれた三嶋輝夫先生による翻訳で読んだのですが、この対話への参加者はいずれにしても、勇気がたんなる大胆さや怖いものの知らずではないという点については一致しています。ただ、「知は勇気とは無関係だ」という意見に対して、勇気とは「恐ろしいことと平気なことについての知識」を持っていることであるという考え方が出されています。実は、ここでの知識という言葉は、いまのフレーズがすぐ後に、ソクラテスによって、「あらゆるあり方の、あらゆる善いことと悪いことについての知識が勇気」である、という議論にも展開されていることから察せられるように、私たちが普通思い浮かべるよりはるかに深いインプリケーションをもった概念です。ただ、ここでは私は、とにかく、勇気が知識という言葉と結び付けられている外形的な点に興味をひかれました。

つまり、この結び付けられ方は、知識をもつこと—それは学問をするということにつながると思います—、勇気の源になるということだと、素朴に理解しておきたいと思います。では、なぜ知識を有する、学問をすると勇気がでるのか。また、そのために何が必要

なのかということです。それを考えるには、何より皆さんのこれまでの学問的な経験で、自分の考え方を初めて発表しようとした時の緊張感、その初心を思い返してもらいたいと思います。

学問で生じた迷いを 勇気こそが乗り越える

皆さんの中には、すでに、いろいろな機会に口頭で発表をしたり、論文を公表したりといった経験をした人も少なくないでしょう。ただ、ディスカッションの中で何か意見を述べるというのとはまた違って、フォーマルに何か自分の考え方や研究成果を発表するいう時には、普通は強い緊張が伴うものです。その手前で立ち止まる学生の姿を、私は何度も見てきました。あるいは皆さんも、その緊張の前に立ち止まることがあるかもしれません。その強い緊張を乗り越えていくのが、学問に携わる時に求められる勇気であると、私は考えています。

自分が公にしようとしていることは、本当に正しいのだろうか、意味があるのだろうか、誰しも迷います。そして、その迷いがあるということは、学問にとってきわめて当然かつ健全なことです。しかし、その迷いを乗り越えないと学問の世界にかかわることが出来ないのですが、そこを乗り越えるのが勇気です。ただ、問題は、その勇気の正体です。それは、たんに大胆さや怖いものの知らずということなのでしょうか。

皆さんがおそらく何らかの形で経験したであろう、そうした迷い、躊躇、逡巡を乗り越えるために、皆さんが何をしたかを思い起こしてもらえればと思います。私の経験でいえば、何度も何度も先人の文献や膨大な資料を読み返してみる、いろいろなアイデアを紙に書いて整理してみる、それを幾度も書き直す、それでも迷いが残れば自分で考えるだけでなく先生に相談する、仲間と議論をする、そうしたことを繰り返してやっと、自分の考え方を公にするという勇気が湧きました。学問の原点はそのようなものであると思います。それは、別の観点から言えば、知というものの



巨大さ、その歴史の中で磨き抜かれてきた姿に対する恐れを知ることです。

さきほど引いた『ラケス』の話の中に、勇気というのは、「恐ろしいことと平気なことについての知識」であるという説明がありました。つまり、恐れを知らないことが勇気ではなくて、恐れを知ることが勇気につながるということであろうと思います。何に対する恐れか、というと、それは学問の世界で言えば、先人が生み出してきた高い水準の研究成果に対する恐れであると同時に、自分の能力に対する恐れ、自分が公にしようとしている考え方、用いている概念や論理、また実験の方法やプロセスの確かさに対する恐れでもあると思います。その恐れを乗り越えていく勇気を生み出すためには、研究倫理もその要素となる誠実な研究を重ねていくこと以外に道はありません。関係する文献や資料を渉猟し、それらを丹念に読み解き、あるいは何度も何度も実験や観測や観察を繰り返しながら正確なデータをきちんと蓄積して分析をくわえていく、そして、その基盤の上に、厳密な概念や論理・論証を自分の言葉で積み重ねていく、そうした誠実な研究姿勢の上にこそ、勇気は生まれます。これから大学院でより高い水準の研究の世界に分け入っていくとする皆さんには、そのような勇気を育んでもらいたいと思います。

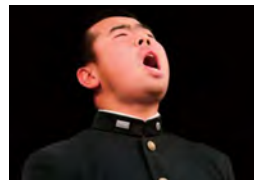
このようにして培われた勇気は、他の人々に対して自分の考えを明確に主張し、批判に対しても真っ向から応えることのできる力となります。学問の成果は社会にスムーズに受け入れられて活用されていくことも多いのですが、そのような順調なプロセスだけが学問と社会との関係ではありません。むしろ、いま社会で支配的な考え方や制度に対する批判あるいは挑戦となるものも少なくありません。例えば、すでに長く学界の通説となっている学説や有力な研究者が主張している学説を批判することは、いささか勇気が求められる場合があります。また、政治や経済、あるいは社会の現状に対する批判的な意見を述べることに、勇気のいることもあります。しかし、そうした批判や挑戦を行うことこそ学問の本

領というべきものであって、それを自由に行う勇気の拠り所となるのが、誠実な研究姿勢の上に組み上げられた概念であり論理です。

一人の勇気を多くの勇気に、そして社会の勇気に

こうした意味において、学問に携わることと勇気とのかかわりを確認した上で、皆さんに一つお願いしておきたいのは、そのように研究を行うことによって得られる皆さん一人一人の勇気を、他の多くの人々の勇気に、また社会の勇気として発展させていくことも、皆さんの使命として意識してもらいたいということです。これは広い意味での科学コミュニケーションの話題に属することかもしれませんが、皆さんの誠実な研究姿勢、そこから勇気が生み出されるというプロセスを多くの人たちに理解してもらい、そのために語ってもらいたいと思います。すでに3年余りが過ぎましたが、あの東日本大震災、それに伴う福島原子力発電所の事故の後、日本の科学は深刻な状況に直面しました。科学の限界にショックを感じた人も少なくなかったと思います。たしか当時、「科学は敗北したのか」といった問題提起や、「地に落ちた信頼」といった表現も科学に対して用いられていたと思いますが、まさにこの時は科学が人々に勇気を与える力を失っていたのです。最近の科学は、その手痛い経験を踏まえながらやっと立ち直ってきつつあるように感じますが、ただ、そこで科学が人々に与えることを期待されている勇気は、盲目的な科学信仰でもなく、科学万能主義でもなく、むしろ科学の可能性に、そしてまた科学の限界に誠実に向き合うことから生まれる勇気であるはずです。そのモデルとなる姿勢を世の中に向けて皆さんに示してもらいたいと思います。

いまの日本社会、そして世界の多くの国々が、貧困、食糧、環境、エネルギー、高齢化、安全、平和など、実に多くの課題に直面しています。これらの課題のカatalogを眺めると、意気を阻喪してしまいそうにもなります。しかし、どんなに難しい課題があっても、どんなに困難な状況があっても、勇気を奮い



他大の学部時代に古環境の復元に興味を持ち、川幡穂高先生のいる東大に来ました。式では総代の言葉に同じ志を感じて刺激を得ました。(太田雄貴さん／理学系研究科地球惑星科学専攻)

起こして状況に向き合い解決を見出してきたのが人類の歴史です。そうした歴史の中で、学問が果たした役割、学問に携わった人々が果たした役割は、決して小さなものではありません。その過程では、学問は、人々に利便性や安全、安心などをもたらしただけでなく、未来への勇気を生み出す役割も果たしたはずであると、私は確信しています。

今日ここにいる皆さんが、誠実な研究姿勢

から生み出されるはずの勇気によって、自らを奮い起こして学問の発展のために貢献してくれること、そしてまた、他の人々にも、社会にも、未来への勇気を呼び起こすような活躍をしてくれることを心から願いながら、私の式辞を終えることにします。

〈平成26年(2014年) 4月11日〉

式辞

この度、東京大学大学院に入学ならびに進学された皆さん、本日はご入学ご進学おめでとうございます。皆さんのご入学ご進学を教職員一同、心より歓迎申し上げます。また、ご列席いただいているご家族の皆様をはじめ多くの関係者の方々にも、心からお祝い申し上げます。

皆さんが、学部とは異なる大学院という新しい環境において、大いに学び、学術研究の第一線等において試行錯誤を行い、ひいては世界レベルで活躍されることを心から祈念しています。

皆さんがこれから入られる学術研究という現場も、社会における多様な現場の一つであります。学術研究という営みが社会から隔絶されて存在することはありません。学術研究という営みに対する社会の理解がないと、このような学術研究活動を社会において継続することはできません。しかし、他方で、学術研究という活動が、社会における通常の組織活動とは異なる原理に基づいて行われていることもまた事実です。例えば、通常の組織において活動する際には、行うべき活動が上位者から指示されるということがしばしばあります。例えば、企業の研究所の場合には、経営戦略のポートフォリオの中で行うべき研究が組織として決定されることも多いように思われます。他方、大学院においては、特に博士課程においては、何をどのように研究するのかという、課題の設定および研究プログラムの設計は、最終的には、皆さんが自らの創

意工夫と責任において行うことが求められます。もちろん、現在の学術研究においては、組織的取り組みも不可欠ではありますが、学術研究活動の根底には、このような究極の自営業者、あるいはベンチャーとしての性格があると思います。

「学問の自由」や「研究の自由」といった概念の役割についても、このような文脈で考えてみる必要があると思います。これらの概念は、しばしば、「科学のための科学」や「研究のための研究」を正当化する概念として考えられてきた面があります。確かに、そのような面もあるのですが、より具体的には、社会において知識生産を促すための組織原理として、再定位することができると思います。つまり、この社会において知的イノベーションを引き起こすには、ヒエラルキー組織の上位者の指示に従って研究を業務として遂行するだけでは不十分です。確かに、研究においても作業として必要な部分はあるのであり、作業部分に関する支援メカニズムは不可欠ではあるのですが、肝心な部分のアイデアは自発的な探索活動の中から生じてくるわけです。そのように考えると、「学問の自由」や「研究の自由」は、ボトムアップなかたちでの多様な試行や実験を可能にすることにより、結果として社会にも寄与する知的イノベーションを促すという知識生産の組織原理を示していると言えます。また、学問や研究における「多様性 (diversity)」の確保もこのような知的イノベーションにつながる源泉となります。そして、知識生産を促すためには、様々な分野の研究者間の自発的なコミュニケーションを促す自由と、自治的な組織形態が必要である



東京大学公共政策学
教育部長

城山 英明



私の好きな藤の花に特徴的に備わる多重形成層を研究するために東大に来ました。今日の入学式は…なんとなくアカデミックな印象です。(山口彩花さん/農学生命科学研究科森林科学専攻)

ということになります。実際に、最近の研究においては、研究分野間の思わぬ接触から新たなアイデアが生まれてくることも多いのではないかと思います。

このように、学術研究という活動は、「自由」を組織原理とするわけですが、他方、学術研究の固有のルールというものも存在します。

従来、研究者による知識生産の主要な動機としては、経済的インセンティブではなく、知的好奇心の満足や専門家共同体の中での同僚からの評価が考えられてきました。そのため、研究者共同体においては、誰の発見かという名誉は倫理的にも重視され、そのような名誉を尊重した上で、なるべく早期に研究成果を研究者共同体で共有化し、それらが無償で利用してさらなる研究成果の創出を促すという方式が活用されてきました。このような方式は、学問的なコモンズ（共有物）の活用と呼ばれてきました。そして、このような方式を維持するために、先人の業績を明示的に引用し、それに独自の貢献を付加するという「引用ルール」は、当たり前ですが根幹のルールとなるわけです。学術研究の現場の掟として、皆さんも、このような学術研究の基本的ルールや研究倫理を認識し、遵守することが求められます。

なお、最近では、知識生産のために、学問的なコモンズを維持するのか、知的財産権をより活用するのかというのも、重要な制度設計における選択肢となっています。知的財産権を活用して研究者が研究成功への経済的インセンティブを得られるのであれば、このような仕組みを活用することで知識生産を促進することができるというわけです。しかし、知的財産権を目的とすると、知的財産権を取得するまで成果を秘匿する傾向があり、また、細分化された対象毎に知的財産権を設定すると、様々な要素の組み合わせによる知識の構築が困難になる面もあることから、知的財産権の活用には限界があることも指摘されています。

また、「学問の自由」、「研究の自由」と安全性や安全保障の確保といった他の社会的価値



学部は他大でしたが、恩師が東大に移ることが決まり、ついてきました。博士課程まで進んで分子レベルから地球のメカニズムを解明します。(本多翼さん／理学系研究科地球惑星科学専攻)

との比較較量が必要となる場面もあり得ます。例えば、学問の自由や研究の自由の重要な一部である研究の公表を、研究成果がテロに使われる恐れがある場合には、安全保障上のリスクへの対応を重視して公表を停止すべきかどうかということが課題となったことがあります。そして、公表を制限するのであれば、政府が主体となるのではなく、学会等が自主的な規制主体となるべきではないかといった点が、制度的選択肢として論じられました。

このように、これから皆さんが属することとなる学術研究の世界は、独自のルールを持ちつつも、社会の通常の組織的活動とは異なった世界であるという面があるわけです。

しかし、最近では、このような学術研究の世界と一般の社会的活動を、再度、近づけていこうという動きもみられます。社会において学術研究に対する理解を増進するためには、学術研究と社会を直結させることは適切でないとしても、社会と学術研究の新たな回路を作る必要があるのではないかということです。皆さんの中には、専門職学位課程に進学される方もおられるかと思いますが、このような専門職学位課程は、学術研究の成果を社会的課題解決に活かすための教育プログラムとして設けられていると言えます。また、博士課程においても、例えば東京大学においても9つのプログラムが設定されている博士課程教育リーディングプログラムでは、博士レベルにおいて社会的課題解決に寄与できる人材の育成が求められています。このようなプログラムにおける人材育成の基礎には、当然のことながら、各学問分野における専門的能力の涵養があります。他方、同時に、関連分野を俯瞰し、他分野の専門家ともコミュニケーションを行いつつ、社会課題解決に寄与する能力が求められています。これは、一見これまでの学術研究で必要とされる能力とは異なるようにも思われますが、自律的にコミュニケーションを行い、課題を発見し、プロジェクトを設計実施する能力というのは学術研究実施に必要とされる基本的能力であるともいえます。現実の社会が急速に流動化する中で、学術研究という独自の世界の組織原理を、よ



り幅広い社会の文脈において活用することが求められているともいえるわけです。その意味では、大学院において学ばれる皆さんの活躍の場面を広がりつつあると言えます。

本日、入学進学された皆さんが、各分野の学術研究の最前線において、また、流動化す

る過渡期の社会におけるグローバルな社会的課題への対応との接点において、世界中から集まる多様な人々との交流を基礎に、幅広い活躍をされることを祈念して、私からの式辞とさせていただきます。

祝辞

平成26年度大学院入学式にお招きいただき、祝辞を述べさせていただくことを大変光栄に思います。このたび東京大学大学院に入学、進学された皆さん、心からおめでとうございます。また、ともにこの日をお迎えになったご家族の皆様にも心よりお祝いを申し上げます。

本日から皆さんはそれぞれの専門分野に分かれて学問の道に進むわけですが、東京大学はまさにその専門的な知力を鍛える場です。東京大学は皆さんに学問の喜びを伝え、知的好奇心を刺激し、皆さんの目を一層輝かせることのできる素晴らしい大学です。

私自身のことをふり返って見ましょう。私は1989年の冬学期に研究生として駒場の大学院総合文化研究科地域文化研究専攻に入り、1990年4月から1996年3月までに、修士課程・博士課程を修了し博士学位を頂きました。20世紀80年代に留学に来た中国人留学生といえば、小・中・高校時代のほとんどを文化大革命の中で過ごし、「知識は無用だ」といわれる時代に、まともな勉強ができず、高校卒業後農村に「下放」された世代です。1977年鄧小平の指示により大学の入試・試験制度が復活した際に、文化大革命の10年間待たされた「高校卒業生」が一斉に受験生となり、激烈な競争を経て、ようやく大学に入りました。その多くは、今度は「四つの近代化」政策の後押しを受けて、海外に留学しました。私もそうした世代の一人です。

1990年4月に修士課程に入学すると、自分より一回りも年下の正真正銘の東大生たちと一緒に勉強するようになりました。彼らの多くは日本の受験有名校の出身者で、難関の中学・高校を経て東大に入り、さらに大学院にまで進んだエリートでした。なぜ、本郷ではなく、駒場の

総合文化研究科に入ったのかと質問すると、「いままですんできたものは一つの専門の学問の中だけでは処理できないことがいろいろあって、ここではそういうことを全部取りまとめて何か新しいものを見つけれられるのではないか」というような意味の話をしてくれて、羨ましくてたまりませんでした。と同時に、このように優れた仲間から学問的な刺激を受けることのできる東京大学の環境は素晴らしいと強く感じました。さらに、文革の10年間で失ったものの多さをあらためて痛感し、この10年間の知的空白に、急いでいろいろな物を詰め込もうとして必死でした。学ぶことに対する貪欲さ、知的な飢餓感は、おそらく同じ時期の中国人留学生がみな感じていたことでしょう。

ふり返ってみると、東京大学のリベラルな学問環境の中で6年間留学生生活を過ごせたことは、自分にとってかけがえのない幸運であり、いままでの人生の中で最も知識を学んだ貴重な6年間であり、研究を進める上で大きな糧を得ることができました。東大生にとって何より貴重なのは、大学での研究を通じて自分の中にある力の大きな可能性を確認できることであり、その後の人生の中で、いかなる困難に遭遇しても、自らの力を発揮できるのだという自信をもらえることです。

東京大学のすぐれた研究と教育の環境は、皆さんに私の体験と同様の貴重な機会を必ずや与えてくれるはずです。ぜひ在学中にこの素晴らしい環境を思い切り活用して下さい。

さて、現在の東京大学では世界第一級の研究・教育を維持するとともに、「グローバル・キャンパス」を構築することが重要な課題になっています。その際、特に重視されていることが二つあります。一つはより多くの、多様な留学生が東京大学で学ぶ環境を作ること、もう一つは国際的な学生交流の推進です。

第一点に関しては、私が入学した1980年代の後半に、東大の学内はすでに国際的な色彩



駐日中国大使夫人

汪婉さん



入学生 VOICE
医科研でゲノムの立場からがん研究をするために来ました。総代の話に泣きそうになり、心が引き締まりました。汪さんの話にも納得です。(如澤浩樹さん／理学系研究科生物科学専攻)

が濃く、キャンパスを歩いていると、英語・フランス語・中国語・韓国語などを話す多彩な国籍の学生の声が聞こえてきました。私が所属した総合文化研究科では、大学院在籍学生全体に対して外国人留学生・研究生の占める割合が常時40%前後に達していました。私が卒業した1996年の時点で、東大には70以上の国々から2,000人近い外国人留学生在学し、留学生の集団は“Another Tokyo-University”と言われるほどでした。各国の留学生の間の共通語は日本語で、ゼミでも、食堂でも、電車の中でも、留学生らは各国なまりの日本語で交流をしていました。

あれ以来、東大は引き続き外国人留学生の受け入れに力を尽くし、外国人留学生在が「普通」の学生として勉学に励めるように手厚く効果的な支援を行うことを目指してきました。私自身の東大留学経験からも、「中国人留学生」だからといって差別されたことは一度もなかったと断言することができます。

ただここで敢えて物足りなさを指摘するなら、いまの東大が掲げる「グローバル・キャンパス」の目標を、キャンパスの主人公である東大生がどのように受け止め、どういう姿勢で関わってきたか、それが必ずしもよく見えない、ということです。

2002年に、駒場50年史編集委員会が「駒場の50年」を編纂した際、私は光栄にも外国人留學生の代表として一文を寄せる機会がありました。いまから20年ぐらい前の東大生に対するやや厳しい苦言で、いまの状況にはふさわしくないかもしれませんが、ここで敢えて引用させていただきます。

「ついでに東大生についても一言。東大教授が一生懸命留学生の世話をすると対照的に、東大生は留学生との付き合いが少ない。東大生はどちらかといえば、異質な相手、考え方の違う相手などとは付き合おうとしない。勉強会とか、授業後の会食などで、留学生らは各国なまりの日本語で一生懸命意見を交換し、激しく議論したが、日本人の学生は、議論が必要になると、あたらすさわらずの対応をしてその場を逃げる。以後は留学生との接触は避ける。生活体験が異なり、したがって感じ方、考え方の異なる人への配慮ができないようである。

中国では「雄弁は金」であるのに対して、日

本では「沈黙は金」であるようだ。ゼミでは、質疑応答が不可欠のはずだが、日本人の学生は沈黙の行（ぎょう）を続ける学生が多い。先生の方もそれを不思議と思わないらしい。だが、留学生の方からは実に積極的に質問をする。ただし留学生の日本語が誤りだらけで、なまりがひどく、自分以外の参加者にはさっぱりわからないことも少なくはなかった。にもかかわらず、日本人の学生は、一向にして「沈黙は金」という姿勢を崩さずに「やせ我慢」をしている。しかし、いざ先生に指名されれば、今度は「一言千金」という見事な応答に、留学生らはただ目を見張るばかりであった。日本の大学国際化に際して、辛抱しているのは先生の方だけではないようだ。

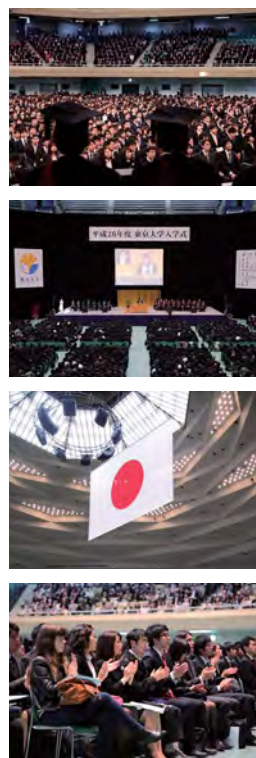
このような20年ぐらい前の私の留学体験を、今日この場で引用するのが適切かどうかすいぶん迷いました。しかし、濱田純一総長が近年入学式、卒業式、学位記授与式の総長告辞の中で、「国際化」や「グローバルである」ということの意義について、繰り返して強調されたのは、「自分と異なった考え方や価値観をもち、異なった生き方をしている人たちと深く触れ合い、あるいは悩んだり、あるいは刺激を受けたりしながら自らを成長させていくこと」です。

総長が何度もこれを強調されるということは、私の在籍していた頃と同じような問題が、現在の東大になお存在しているからでしょうか。いまの世界は20年前より遥かに国際化の度合いが深まり、各国の社会経済の姿も大きく変容しています。さまざまな問題を一国の範囲の中で解決するには限界があり、日本はアジアあるいは世界という大きな枠組みの中で、問題の解決に取り組んでいかなければなりません。

東大生は将来国際的な場面で仕事をする機会がますます多くなるものと想定されます。自分と異なった考え方や価値観を持ち、異なった生き方をしている人たちとの出会いは不可欠なこととなります。私は、自分の留学経験、そしてマレーシア、韓国、日本での仕事の経験で、自分と違った価値観、異なった習慣や生活スタイルをもった人々と交わることを多く学んできました。最初は戸惑うことがあり、ぶつかり合うことがあり、理解し合えぬ自分の無力さを感じたこともしばしばありました。しかし、まさに、濱田総長が指摘



入学生 VOICE
水域や緑地でのフィールドワークを行い、修士論文が国際誌に掲載されるようがんばります。式では汪さんの話が印象的でした。(青山光さん／農学生命科学研究科生圏システム学専攻)





されたように、お互いの触れ合いの中で、これまでは自分でも知らなかった、自分がもっている潜在的な力が引き出され、もう一人の自分に出会う経験を重ねていくことができました。それが人生における成長ということでしょう。ぜひ積極的に海外からの学生たちと交流してください。

これは現在の東大のもう一つの課題である国際的な学生交流の推進と深く繋がることだと思います。わたくしは自分の留学経験から、皆さんに対して一定期間の海外留学をぜひお勧めします。国際感覚を身に着けた「タフな東大生」になっていただきたい。さらに、いわゆる「欧米先進国」だけではなく、中国のような発展途上国への留学もお勧めしたいと思います。

日本人の海外留学は2004年に8万余りと過去最高の人数を記録した後、2011年には5万人台になり、30%減少しました。対照的に中国の場合、2004年に11万人余りだったのが、2011年は34万人近くなり、3倍になっています。日本にいる中国人留学生は10万人前後で、外国人留学生全体の6割を占め、私が留学した25年ぐらい前からつねにトップとなってきました。また、アメリカへの留学は、日本人学生は、大学院20%となっていますが、中国とインドは、大学院71%となっていて、日本は他国に比べ大学院レベルの海外留学がとくに少ないようです。

日本では、海外留学を通じて「他者を意識する」ことの必要性、それによって自分が成長するチャンスを得ることの重要性が繰り返し強調されています。他方、中国の若者にとって、「他者」と向かい合うことは、通常それほど面倒なこと、厄介なこととは意識されていません。そもそも「他者を意識する」という表現が、社会ではそれほど一般的ではないのです。裏返して言えば、「他者」という概念に対してそれほど敏感ではないということなのかもしれません。「他者」に対する意識は、このように、日本と中国の間で違いがあるようです。留学を通じて、こうした問題を体験し考えてみるだけでも十分に面白いことだと思います。

今日の世界は、私が東大生だった頃と比べ、極端に小さくなっており、世界のある場所で起こった出来事が直ちに世界中に周知され、地域の小さな衝突が世界に大きな影響を及ぼします。皆さんが社会の中核として活躍する20年後は、情報の更なる共有化により、世界を活躍の舞台とすることははや当然のこととなるでしょう。入学進学された皆さんが、この東京大学の素晴らしい環境を生かして存分に研究に邁進されると同時に、海外留学を通じて国際感覚を磨き、人的ネットワークを形成し、世界を舞台に素晴らしい活躍を展開されることを祈念して、私からの祝辞とさせていただきます。

入学生総代宣誓

薬学系研究科 鵜飼 貴也さん



大気の研究がしたくて、設備と環境に優れる東大に来ました。総代の鵜飼君とは小・中で同窓。宇宙と薬学を結ぶ発想に感激しました。(針ヶ谷智生さん／理学系研究科地球惑星科学専攻)

本日、このような素晴らしい式を挙げていただき、心から感謝申し上げます。

この場をお借りして、宣誓の前に少し「夢」の話をさせていただきます。

私には、夢があります。今私たちの遥か上空、雲を突き抜け重力の束縛を超えたその先に、宇宙が広がっています。私はそこまで行き、生まれ育ったこの星の姿を見てみたい。宇宙飛行士となり、人類の智を、歩みをこの星の外側へと広げ、「人類の夢」を叶えていくような仕事をしたい、と思っています。

ではなぜ私は今ここにいるのでしょうか？それは、大学院で学問を追求する姿勢を学ぶこともまた、私の夢に繋がっていると考えたからです。人類が積み上げてきた叡智は私たちに様々なものを与え、いくつもの夢を叶えてきました。衣食住、交通、通信、教育、健康、好奇心の充

足…全ては先賢たちの勇気ある歩みによって開拓されてきました。しかし人類は、さらなる夢を見ます。そして研究とはその夢を叶える仕事なのではないかと私は考えています。先頭に立ち、人類の夢を追っていく。それもまた社会への貢献の一つであり、名誉ある仕事なのではないでしょうか。私たちにとって大学院は、その研究の基礎をじっくりと学ぶことのできる素晴らしい環境です。私はそう信じ、まずは今の私の力と好奇心が及ぶ分野、すなわち薬学で人類の夢に少しでも貢献しながら、いずれ自分が夢見る宇宙でも新たな智を探索できるように、物事を考察する姿勢を学ぼうと決心して今ここに立っているのです。

ここに在る全ての学生が、一心不乱に学問に打ち込めば将来何でもできる、

どんな夢でも叶えられると思うのです。だからこそ私たちは、高い意識を持って研究に、勉学に励まなくてはならない。いずれ国を代表する「人類の夢を追う者」となるために、夢を追うその姿で人々を未来へ導いていくために、私たちはこれからの大学院生活を全力で生きていかなければならないのです。

よってここに宣誓します。今私は本大学院の新入生を代表し、最高学府大学院の学生たる責任と矜持を持って、人類の夢を共に叶えていくために、全身全霊で学問に打ち込むことをここに誓います。

最後に、私自身が、自分の夢にも真摯に向かい合い、かつ自然に対する敬意を持って薬学の学びを深め人類に貢献することを誓い、宣誓の言葉の結びと致します。

式典写真：尾関裕士

※「入学生(卒業生・修了生)VOICE」以外

有機金属化合物の開発と本学の教育研究発展に多大な貢献

根岸英一先生に 名誉博士称号を授与



おめでとう
ございます!!



(←)名誉博士称号授与式(司会:松本洋一郎理事)において、名誉博士記を手渡される根岸先生。青年期をすごしたキャンパスでの式典に少々緊張なさっているご様子もうかがえます。(↑)記念品として金色に輝く懐中時計を受け取り、破顔一笑の根岸先生。濱田総長の表情にも喜びが満ちあふれているのがわかります。(↓)長年根岸先生と苦楽をともにされてきた奥様のすみれさんにも、原田昇工学系研究科長からお祝いの花束が贈られました。

根岸先生のご功績

根岸英一先生は、複雑な有機化合物の合成に用いる有機金属化合物が主にマグネシウムやリチウムなどを含むものにまだ限られていた時代に、他の多くの典型および遷移金属を含むものも有用な試薬・中間体として使用できるという信念に基づき、広範な金属を含む有機金属化合物の開発と応用に極めて先駆的な貢献を果たされました。

特に、有機合成に欠かすことのできないクロスカップリング反応の適用範囲の拡大に貢献され、「根岸カップリング」と呼ばれるパラジウム触媒を用いる有機亜鉛化合物のクロスカップリング反応を開発した功績により、2010年にノーベル化学賞を受賞されました。

また、東京大学大学院工学系研究科化学生命工学専攻における講義や研究指導を通じて、学生に多大なる刺激を与えるなど、本学の教育面においても大きな貢献を残されています。

さらに、2011年4月からは東京大学総長顧問として、国際的あるいは社会的見地から総長に助言と支援を行ってられました。

これらの功績は、東京大学名誉博士称号授与規則が掲げる、「学術文化の発展に特に顕著な貢献があり、本学において顕彰することが適当と認められる者」に合致するため、東京大学教育研究評議会の議を経て、このたび根岸先生に東京大学名誉博士号の称号を授与することとなりました。

根岸英一先生ご略歴

1958年	東京大学工学部応用化学科を卒業
1960年	ペンシルバニア大学博士課程に入学
1963年	同課程を修了し Ph.D (理学博士) を取得
1972年	シラキュース大学助教授に (のち准教授に)
1979年	パデュー大学教授に
1999年	同大学特別教授に
2011年	東京大学総長顧問に

2014年3月13日、工学部2号館において、根岸英一先生に対する名誉博士称号の授与式が開催されました。本学の名誉博士号授与は、マリオ・バルガス＝リョサ氏に続き7人目、日本人では初めてとなります。「根岸カップリング」と呼ばれる有機亜鉛化合物のクロスカップリング反応を開発した根岸先生は、2010年にノーベル化学賞を受賞。工学系研究科での講義や研究指導を通じて学生に大きな刺激を与えるなど、本学の教育研究の発展にも多大な尽力をいただいています。式典では濱田純一総長が名誉博士記及び記念品を授与。引き続き「21世紀の繁栄を支える遷移金属触媒」と題した講演会が行われ、多くの参加者が熱心に聴講し盛況のうちに終了しました。

濱田総長の挨拶

根岸先生、そしてこの場にご列席の皆様、東京大学総長としてひとことご挨拶を申し上げます。本日はご多忙の中、東京大学におこし下さり、厚くお礼を申し上げます。根岸先生にはこれまで東京大学総長顧問をお務めいただいておりますが、このたびこのような形で東京大学にお迎えすることができ、誠に光栄に存じております。

根岸先生のご業績についてはさきほど紹介がありましたが、東京大学の教職員・学生はこのような先生のすばらしいご活躍に対して、学術の先達として深い尊敬と感謝の思いを持っております。本日ここに、東京大学の卒業生である根岸先生に対し、東京大学名誉博士の称号をお贈りできることは、私たちの心からの喜びであります。

東京大学は、その大学憲章に示されているとおり、21世紀という時代において世界の公共性に奉仕する大学として、これまで以上にグローバルな展開を図り、学術文化の発展に貢献してまいりたいと考えています。国際的な場で幅広く活躍されてきた根岸先生に対する、このたびの名誉博士称号授与は、そのような大学たることを目指すという東京大学の強い決意を改めて示すものでもあります。

根岸先生には、ますますお元気にて、東京大学の教育研究の一層の発展のために、そして世界の学術のさらなる発展のために、引き続きお力をお貸しいただければと願っています。

最後になりますが、本日のこの式典にご列席の皆様、根岸先生への東京大学名誉博士称号授与をともにお祝いする喜びをいただきまして、改めて感謝を申し上げ、私からのご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

根岸先生のご挨拶

総長先生、(司会の)松本理事、原田先生、皆様に、厚く御礼申し上げます。

名誉博士の称号をいただくということで、これは非常に名誉なことなのですが、ちょっと(式典会場の)外に出てみますと、およそ半世紀近い昔、いえ、1958年の卒業でございすから半世紀以上も昔に、私が2~3年ほどすごした工学部の4号館が、すぐ前にあるじゃないですか。それで、ふるさとに帰ってきたような気分がしております。また、新しくお部屋をいただいたということで、非常に楽しみにしているところでございます。

これは非常に名誉なことだと私は思っております。もうあと1年ちょっとで80歳になるところですが、またこれをきっかけにしてぜひともさらなる努力をしていきたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。どうもありがとうございました。



(←) 工学部新3号館1階に新設された根岸英一名誉博士室(の銘板)。今後のさらなるご指導が期待できそうです。

根岸先生記念講演会「21世紀の繁栄を支える遷移金属触媒」要旨

私は20歳の頃に、これからの世の中は英語かなと考え英会話を勉強しました。それが功を奏し1960年にフルブライト奨学生としてペンシルバニア大学大学院に入学し、そこで学者になる自信を得ました。2年目からは研究室を選んで実験を始めましたが、失敗ばかりでした。その時に有機合成そのものをシンプルにできないかと考えました。

思いついたのがレゴです。ひとつのピースには穴が開いていてももうひとつのピースには突起があり、2つを合わせると結合する。若気の至りではありますが、こういう具合に有機合成ができれば、簡単に色々な物が出来ると考えました。ひとつのピースにハロゲンを結合させると、そのピースは電子が不足しプラス性になる。もうひとつのピースにはメタルを結合させることでマイナスイオン性を持たせる。この二つのピースを触媒の元に結合させるのがクロスカップリングです。このアイデアに取り組む機会を得たのはパデュー大学の助手になった1968年でした。

この反応で重要な鍵を握るのが触媒です。dブロックの遷移金属であるパラジウムは高価ですが、非常に優れた触媒です。実際、パラジウムをはじめとする白金族の金属は排気ガス処理するために車のマフラーに使われるなど身近なものです。

私は1976年にアセチレン結合をヒドロアルミニウム化してできるアルケニルアルミニウムをクロスカップリング反応に適用しました。その後、亜鉛化合物を利用すると効率よくクロスカップリングが進行し、複雑な有機分子の合成にとても有効なレゴピースなことを実証しました。また私は、光学活性ジルコニウム触媒を用いるオレフィン結合の不斉カルボアルミニウム化も開発しました。できたアルキルアルミニウムをオレフィンに導くと、再び不斉カルボアルミニウム化できる。こうして、生理活性物質に多く見られるポリプロピレン構造を、完全に立体化学を制御して合成できました。このようにdブロック遷移金属触媒は、現在の有機合成になくてはならないものの一つです。

東京大学の新しい英文略称



THE UNIVERSITY OF TOKYO

UTokyo のガイドラインを制定しました

東京大学の英文略称に関するガイドライン

東京大学の表象に関する懇談会
英文略称ガイドラインワーキンググループ
平成 26 年 3 月 6 日 制定

<参考>

※東京大学の公式英文略称は、平成 25 年 9 月 17 日付けで、Today から UTokyo に変更されました。

(基本的事項)

1. 東京大学の公式英文略称（以下「東大英文略称」という）は **UTokyo** である。
2. UTokyo は東京大学の公式英文名称（以下「東大英文名称」という）
The University of Tokyo の略称である。
3. UTokyo の読みは「**ユートーキョー**」である。

(東大英文略称の使用にあたって)

4. 東大英文略称を表記・表現する際は、従来 UT、Today 等を用いていたものを含め、前三項を遵守し UTokyo とすること。
5. 東京大学としての活動や活動成果、指標等に対し英語名称を設定するにあたり東大英文略称を用いる場合も前項を準用すること。（イベント、プロジェクト、組織、アドレス、システム、制作物等無形、有形を問いません。）
6. 設定された英語名称の各単語から任意の文字を抽出して作成する略名称については特に制限を設けないが、従来の略名称との混同の可能性を避けること。（[補足説明 1](#) の<6 項に関わる用例>を参照）
7. 本ガイドライン制定後に UTokyo 以外の東大英文略称を使用しないこと。

(UTokyo への移行)

8. 既存の名称の一部に UT や Today 等、UTokyo 以外のものが使用されている場合は、本ガイドラインに則して、適宜 UTokyo へ移行するものとする。ただし、第 6 項に該当するものは、その限りではない。
9. 本学ドメインの第 3 レベルドメイン u-tokyo は、移行の際に影響の及ぶ範囲が甚大であるため、当面は従前どおり使用するものとする。
10. 移行に掛かる経費は、既存の名称等を所管する部署の負担とする。
11. 移行のための経過措置を平成 27 年度末までとする。

補足説明 (東大英文略称の使用にあたって)

1. <6 項に関わる用例>

略す場合には、UTokyo の U と T のどちらを選んで略称としてもよい。

- (1) Today Sustainable Chemistry Research ⇒ TSCR (×)
UTokyo Sustainable Chemistry Research ⇒ TSCR (○)
- (2) Today Security Laboratory ⇒ TSL (×)
UTokyo Security Laboratory ⇒ TSL (○)
UTokyo Security Laboratory ⇒ USL (○)
UTokyo Security Laboratory ⇒ UTSL (○)
UTokyo Security Laboratory ⇒ UT-SL (×)

※ハイフン等で区切ると、UT が独立した略称として使用されるおそれがあるため不可。

2. <Facebook や Twitter 等への対応について>

Facebook や Twitter 等 SNS への対応については、東京大学広報室からの平成 26 年 2 月 12 日付け通知文書「SNS サービスアカウント名について」のとおりとする。

ちなみに
日本語略称は
従来通り
「東大」で
いいんだよ
(あたりまえか)



(本件に関する問合せ先) 本部広報課: kouhoukikaku@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

東京大学の英文略称が Todai から UTokyo に変わったことは、
本誌1445号でも報じたとおりですが、このほど、新しい英文略称を使用するに
あたってのガイドラインが制定されましたので、左頁に全文を掲載いたします。
右頁にしつこく掲載した、うっかり間違いがちな NG 例と合わせて読めば、
UTokyo へのなじみ感は飛躍的に上昇するはず。どうぞよろしくお願いいたします。



Good bye Todai
Hello UTokyo!!

ついうっかり 間違いがちな NG 表記例

過去の使用例のなかから間違いやすい例を15個ピックアップしました。英文略称を使用する際にはくれぐれもご注意ください。

UT 使わないでください。正しい表記はUTokyoです。	Todai 使わないでください。正しい表記はUTokyoです。	TODAI 大文字でもNGです。正しい表記はUTokyoです。
TokyoU UとTokyoの順を入れかえて表現するのはNGです。正しい表記はUTokyoです。	U Tokyo UとTの間にスペースを入れるのはNGです。正しい表記はUTokyoです。	UT okyo かといって、Tとoの間にスペースを入れるのもNGです。正しい表記はUTokyoです。
UTo k y o もちろん、他の部分にスペースを入れるのもNGです。正しい表記はUTokyoです。	U-Tokyo UとTの間にハイフンを入れるのはNGです。正しい表記はUTokyoです。	UT-okyo かといって、Tとoの間にハイフンを入れるのもNGです。正しい表記はUTokyoです。
U.Tokyo UとTの間にピリオドを入れるのはNGです。正しい表記はUTokyoです。	U,Tokyo かといって、UとTの間にカンマを入れるのもNGです。正しい表記はUTokyoです。	U?Tokyo もちろん、UとTの間に?を入れるのもNGです。正しい表記はUTokyoです。
U!Tokyo 当たり前ですが、UとTの間に!を入れるのもNGです。正しい表記はUTokyoです。	U@Tokyo まさかとは思いますが、UとTの間に@を入れるのもNGです。正しい表記はUTokyoです。	U(・・・)Tokyo 老婆心ながら、UとTの間に顔文字を入れるのもNGです。正しい表記はUTokyoです。

もうこんなに 広がっている UTokyo 使用例

本部の部署をはじめとして、全学でUTokyoが使われ始めています。いっそうの普及にご協力をお願いいたします。



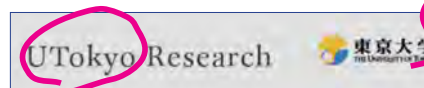
●東大フォーラムの英語名称



●Twitterのアカウント



●Facebookのアカウント



●UTokyo Research (旧Todai Research)



●UTokyo-atlas (東京大学事務手続き案内サイト)



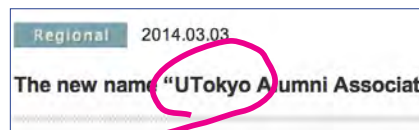
●東京大学海洋アライアンスの英語名称



●政策ビジョン研究センターの英語名称



●TREE (総合図書館の学術情報検索サービス)



●東大アラムナイ (卒業生サイト) の英語名称



●東大ポータル(UTokyo Portal)の英語名称



●東京大学出版会のイベント名

ひょうたん島通信

大槌発! 第19回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬萊島という小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。

三陸の“海の幸”のこと、知っていますか?

河村 知彦

大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター センター長・教授

海底の岩に付くエゾアワビ。三陸の藻場に棲む最大級の動物です。どこに“目”があるかわかりますか?

三陸の“海の幸”と言えば、カキ、ホタテ、ワカメ、アワビ、ウニ、サケなど、日本人なら誰もが知る代表的な水産物が並びます。日本で獲れるこれら水産物のかなりの割合が三陸産なのです。しかし、ほとんどの皆さんは“海の幸”たちが実際に海の中でどのように生きているのか、どのようにして我々の食卓まで運ばれるのかご存じないでしょう。

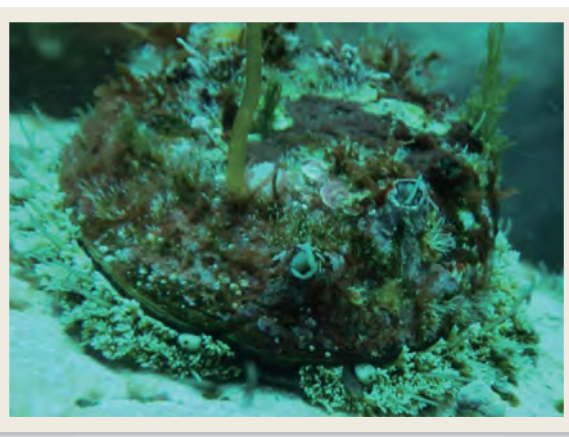
私たちの食卓に上るカキ、ホタテ、ワカメは、そのほとんどが“養殖もの”です。大槌湾でもそれらの養殖が盛んに行われています。“養殖もの”のカキ、ホタテ、ワカメは、湾内に設置された筏からつるされ、本来の生息環境とはかなり異なる環境で育てられています（“天然もの”のカキ（マガキ）やワカメは岸近くの岩に付着して生きており、ホタテ（ホタテガイ）は海底の砂地などに棲んでいます）。しかし、人間が彼らに餌をやっているわけではありません。カキやホタテは植物プランクトンなどを餌とし、植物であるワカメは海水中に含まれる栄養分を吸収して育ちます。

一方、アワビ（エゾアワビ）やウニ（キタムラサキウニ）は海藻が生える岩場に

棲んでいて、漁獲物のほとんどが“天然もの”です。ただし、アワビの場合には人の手で育てられた稚貝も放流されていて、漁獲されるアワビの一部はそれらの放流された個体が自然環境下で大きくなった“放流もの”です。

サケが生まれ育った川に帰ってくることはよく知られていますが、サケの稚魚の大半は人の手である程度まで大きく育てられた後に放流されたものです。それから“放流もの”が川を下って海に旅立ち、大きくなって川に戻ってくるわけですが、彼らは放流後の数年間を海的环境下で過ごし、自然の生産力を使って成長するのです。

このように“養殖もの”や“放流もの”の海の幸であっても、そのほとんどは自然の生態系の中で、人の手の及ばない変動する自然環境の影響を強く受けて育ち



ます。生活史の大部分が人の管理下に置かれている家畜や農作物とは大きく異なります。

大地震と大津波は、私たち人間社会ばかりでなく、三陸の海の生態系やそこに棲む生き物にも大きな影響を与えましたが、その影響は棲んでいる場所や生活の仕方、人間との係わりの程度などによって様々に異なっていたことがわかってきました。その詳細については、いずれこの「ひょうたん島通信」でも詳しくご紹介したいと思います。

ぴーちゃん日記

新巻鮭発祥の地 大槌町

メーユちゃん*の大好物の新巻鮭。実は大槌町が発祥の地であるという事実を、皆様ご存知でしょうか？ 豊臣秀吉公天下の時代に、大槌城主の大槌孫八郎政貞が、いち早く江戸に着目し、もともと地元で消費するしかなかった「鮭」を塩蔵加工し、長期の保存と輸送を可能にできたのが「南部鼻曲がり新巻鮭」です。江戸や都に運ばれた新巻鮭は大評判となり有名になりました。そんな歴史と伝統から、大槌町の皆様は「南部鼻曲がり新

巻鮭」に熱い思い入れがあります。大槌町では水産物全体のブランド価値を上げる取り組みをしていますが、中でもそのシンボルとして思い入れのある新巻鮭に力を注いでいます。大槌に20軒以上ある加工事業者。それぞれがこだわりの製造方法を持ち、味も違います。そんな加工事業者がその個性を生かしつつ連携して「発祥大槌町の南部鼻曲がり新巻鮭」のブランド価値を高め、広く発信しようと取り組んでいます。大槌町特産品の新

国際沿岸海洋研究センター事務職員の「ぴーちゃん」です。5年前、岩手大学から出向で沿岸センターに着任し、大槌町で3年程過ごすも、震災によりふたたび岩手に異動。2年の時を経て2013年4月から戻ってきました。

巻鮭をぜひ皆様の食卓に！！



※大海研「プロジェグランメーユ」の広報大使

大槌町発祥【新巻鮭】Facebookページ→ <https://www.facebook.com/aramakisake.otsuchi>

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）

ききんの「き」

—東大基金で森を動かす—

第12回

手塚 安澄 渉外本部 渉外・基金課企画チーム・係長

安田講堂の新たな歴史のスタートに名を刻もう！

現在、本郷キャンパスでは安田講堂の全面改修工事が進められています。今回の工事は、東日本大震災による被害補修と耐震改修工事だけでなく、講堂としての機能の拡張や、文化財としての修復や設計当初のデザインの再現を含んだ、大がかりなものとなります。

この大プロジェクトを完遂するには、国からの補助だけでは十分ではありません。既に教職員の皆さんからも多くのご協力を頂いていますが、次の100年へ継承していくための安田講堂の再スタートに、更なるご支援をよろしくお願いいたします。

安田講堂改修寄附プロジェクトへご支援を！

寄附募資金額：6億円（4月11日時点で約6,564万円）

寄附募集期間：平成28年3月まで

（改修工事は平成26年12月終了予定）

寄附金額：一口1万円

複数口のご寄附を歓迎いたします。

ご寄附への感謝：

●1万円以上：特設寄附者銘板にお名前を記して永く顕彰させていただきます。

●10万円以上：安田講堂の「椅子」にお名前を刻印したプレートを残し、永く顕彰させていただきます。

・30万円以上：講堂1階席（728席）

・10万円以上30万円未満：講堂2階席（408席）

※先着順となります（申込受付日を基準）。

※すでに学内外から多くのご寄附の申込を頂いています。椅子の状況は東大基金HPでご確認ください。

ご寄附は、給与控除、基金HP（クレジットカードも可）、振込用紙のいずれからも受け付けています。申込方法・特典の詳細は東大基金HPでご確認ください。



100年後に今の形の安田講堂を残すために！

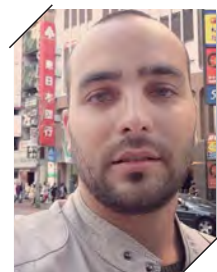
東京大学基金事務局

TEL 03-5841-1217 : E-mail kikin@adm.u-tokyo.ac.jp
内線21217 : URL http://utf.u-tokyo.ac.jp/

留学生さん いらっしやい！

第11回

海を越えて東大にきた学生に聞きました。



🇸🇨 コスタリカ

レネ・カストロさん

René Castro

新領域創成科学研究科
修士課程1年

関心分野は、音楽、食べ物、政治、ソーシャルメディア、持続可能な開発、そして人生そのもの。自分のことは「夢見る学生」と思っているそう。

Q. どうして日本に来たんですか？



仕事への取り組み方やイノベーションへの情熱など、日本にはラテンアメリカが学ぶべきことがいろいろあると思ったから。また、私が関心を持っている海洋に関するサステナビリティ学の分野で進んだ国だったからです。

Q. ではどうして東大を選んだんですか？

関心を持ったのは2009年の初来日時。アジア一の大学に入ろうと思い始め、GPSS-GLI^{*}という魅力的なプログラムを知って決めました。



^{*}サステナビリティ学グローバルリーダー養成大学院プログラム

Q. いま研究しているのはどんなこと？



海洋エネルギーと海洋炭素隔離のためのTriple I Indexという指標を研究しています。人や環境に対するリスク、コスト、経済的利点などからなる比較的新しい包括的指標です。

Q. 日本で困るのはどんなこと？

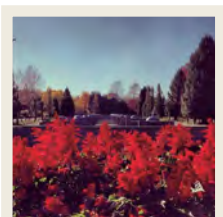
一番困っているのは言葉の側面です。特に、私にはいくつか食物アレルギーがあるので、食品に含まれている成分をきちんと確認できないのはとても辛いことなのです。



Q. 日本でのお気に入り？



一番好きな場所は、柏ロッジの前にある柏の葉公園です（写真）。通学のため毎日自転車を通るたび、新鮮な空気を吸い、行き交う人々や移ろう色合いを眺めて癒されています。常に新しい驚きがある公園です。



協力：国際センター本郷オフィス 制作：本部広報課
※ご本人の英語を本部広報課が日本語に訳して掲載しています。

ワタシのオシゴト 第98回

RELAY COLUMN

教養学部等事務部教務課
前期課程第一係

高瀬 恵実

思い描いていた大学職員のオシゴト



駒場のゆるキャラ、ユータスくん&Miyoちゃんと。

東大に入学した学部生が、必ず初めの二年間在籍する教養学部の教務窓口で働いています。授業の履修や休学の相談にのったり、学生証の再発行の手続き等を行なっています。毎日沢山の学生から元気なエネルギーをもらっています。そんな日々の窓口対応で最も驚いた事は、インフルエンザだと診断された学生が、マスクもせず相談に来たことです！ 対応後、すぐに窓口を消毒しました（笑）。

学生だけでなく、先生方と接する機会が多い点にもやりがいを感じています。例えば、来学期の時間割に関する打合せや、学期末試験の監督者の出欠チェックなどを通じて、顔と名前を覚えてもらえると、嬉しくなります。

就職する前に自分が思い描いていた大学職員のオシゴトは、まさに今自分が勤務している部署のような気がしています。

オシゴトがない休日は、外に出かけることが多いです。遊園地（絶叫マシン）が大好きで、ここ半年間で、ディズニー、USJ、長島スパーランドに行ってきました。いつか全国制覇するのが夢です！



係の歓迎会♪ 参加者の平均年齢約29歳！

得意ワザ：一晩寝たら、嫌な事は全て忘れる（はず？）。

自分の性格：おおざっぱな楽道家。

次回執筆者のご指名：清水響子さん。

次回執筆者との関係：前の部署のお隣さん。

次回執筆者の紹介：淡々と仕事をこなすしっかり美人。

Crossroad

産業界と大学がクロスする場所から、産学連携に関する“最旬”の話題や情報をお届けします。

産学連携本部

第101回

著作権とはどのような権利？（その4）

前回まで（その1～その3）は、著作権の「財産権」の側面について説明してきましたが、今回は、著作権のもう一つの側面である「著作人人格権」について説明します。今回で著作権の概要の説明は終了します。

著作人人格権は、著作権（財産権）とは異なり、譲渡やライセンスすることはできず、相続の対象にもなりません。著作権（財産権）を他人に譲渡した場合でも、著作人人格権は著作物の創作者に帰属したままになりますので、著作権（財産権）の譲渡契約の際、著作人人格権は行使しない旨の特約がなされることがあります。この著作人人格権の権利期間は、著作物を創作したときから著作者が死亡するまでです。

著作人人格権は、以下の3つの権利に分けることができます。

1. 公表権

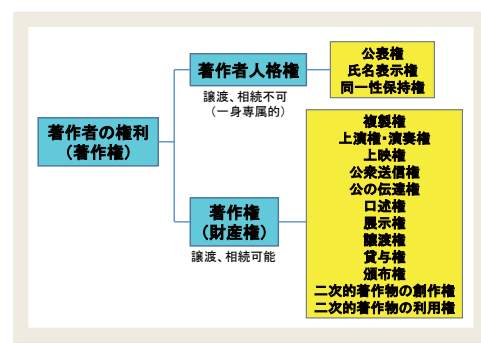
公表権は、まだ公表されていない自分の著作物を公表するかしないか決定できる権利です。例えば、公表前の他人の研究論文を無断で公表すると、この公表権の侵害となります。

2. 氏名表示権

氏名表示権は、自分の著作物を公表する時に、著作人名を表示するかしないか、表示するとすれば、実名（本名）か変名（ペンネーム等）かを決定できる権利です。例えば、ある学者が原稿を執筆し、それを本として出版しようとする場合、学者がペンネームでの出版を要求したのに、出版社が無断でその学者の本名で出版すると、この氏名表示権の侵害となります。

3. 同一性保持権

同一性保持権は、自分の著作物の内容や題号を、自分の意に反して無断で改変（変更・削除等）されない権利です。例えば、出版社が学者の執筆した原稿に無断で修正を加えて本を出版すると、この同一性保持権の侵害となります。


<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

インタープリターズ・バイブル 第81回

情報学環 教授
教養学部附属教養教育高度化機構
科学技術インタープリター養成部門

佐倉 統

STAP細胞騒動から考える

理化学研究所の発生・再生科学総合研究センターの小保方晴子ユニットリーダーが『ネイチャー』に発表したSTAP細胞。画期的な発見と大騒ぎだったのが、論文に多数の捏造や剽窃が見つかって、一転、別の意味で大騒ぎになっている。

ここでは、論文の体裁と科学的成果の関係について確認しておきたい。重要な問題であるにもかかわらず、あまり取り上げられてはいないように思うからだ。

小保方論文の剽窃や捏造に対して、「大事なのはSTAP細胞が存在するかどうかで、論文の書き方などどうでもいい些末なことだ」と擁護する意見が、インターネット上などで散見される。論文の一部をコピペしても、実験結果が正しければそれで良いのだという論調である。あるいは、博士論文などにはある程度のコピペはあって良いと言う、とんでもない発言まで見られる。

このような意見は、根本的に間違っている。STAP細胞が実在するかどうかは、その実験結果の記述によって表現される。「論文の書き方」が悪ければ本当にそのような現象があったのかどうか判断できないし、その研究の科学的意義も読み手に伝わらない。論文の書き方というのは、科学的な成果が体现されているものなのだ。だからこそ、大学院の修士論文や博士論文で、論文の書き方をきちんと訓練するのである。この博士論文などにコピペもやむなしというのは、なんのために博士論文という訓練があるのか、その目的と意義をまったく履き違えた、見当違いの意見である。

にもかかわらず、「科学的成果＝重要な中身」、「論文の書き方＝些末な形式」という見方が後を絶たないのはなぜなのだろうか？

大型の研究開発プロジェクトの中に、倫理的問題や社会的問題を担当するチームが置かれることが、最近では珍しくなくなってきた。科学技術インタープリターのキャリアパスが増えるという意味ではありがたいことだが、ぼくの経験からすると、研究開発のための支援業務のような扱いを受けることが多いのである。科学的成果こそが重要で、論文の書き方や社会的問題は付随的な案件であると考えた精神構造と、根っこは共通しているのではないと思う。

科学技術インタープリター養成プログラム
<http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp/>

救援・復興支援室より 第35回

本学の救援・復興支援室の最近の状況や、遠野分室の日々の活動の様子をお届けします

救援・復興支援室の活動(3月)

3月 福島県相馬市「育英館・寺子屋」学習支援ボランティア
(「育英館」＝相馬市生涯学習会館 「寺子屋」＝相馬市内の応急仮設住宅の集会所)

ザシキワラシの日常

本部企画課係長(遠野分室勤務)



文：佐藤 克憲

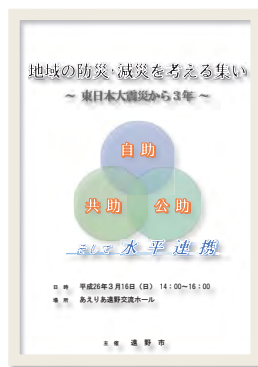
去る3月16日、遠野市主催の「地域の防災・減災を考える集い」に出席してきました。このイベントは、同市が行った岩手県沿岸被災地への後方支援活動を振り返りつつ、今後の防災・減災への意識の高揚と地域防災力の向上を図るために企画されたもので、事前に用意された椅子では足りなくなるほどの市民等約320人が集まり、市民の防災・減災意識の高さに驚かされました。

内容としては、NHK解説主幹で、長年災害や防災について取材をしてきた山崎登氏による基調講演、震災時実際に後方支援を行った遠野市内の建設業協会や栄養士会等の活動事例発表等、非常に中身の濃いものでした。中でも山崎氏の講演の「阪神や東日本の震災時に役に立ったことは、ほとんどが事前に準備をしていたものであり、防災対策は決して人を裏切らない」という話が印象に残りました。

遠野市は東日本大震災以前から、自衛隊等も交えた大規模な防災訓練を行っており、昨年度末には岩手県内の自治体では初めて「遠野市防災基本条例」を定める等、先を見据えた防災・減災対策に本気で取り組んでいます。本学でも、各組織単位で防災訓練や自衛消防隊活動等の取り組みを行っていると思いますが、大災害時の本学の被害を少しでも減らすためには、本学構成員の人数と同程度の人口である、遠野市と同じくらいの本気度で取り組む必要があるのではないかと感じました。

今回もお読みいただき「オアリガトガンス！」

市防災基本条例の基本理念が表紙に描かれた資料。



http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/info_j.html
Email : kyuenfukkou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
内線 : 21750 (本部企画課)

トピックス

全学ホームページの「トピックス」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/topics/>)に掲載した情報の一覧と、その中からいくつかをCLOSE UPとしてご紹介します。

掲載日	担当部署	タイトル	実施日
3月12日	生産技術研究所	東京大学 ITS セミナーシリーズ 23 「ITS セミナー in 大分」開催される	2月6日
3月13日	サステイナブルキャンパスプロジェクト室	TSCP 室と附属演習林が「カーボン・マーケット EXPO2014」にコラボ出展	3月4日
3月17日	宇宙線研究所	宇宙・素粒子スプリングスクール 2014 が開催されました	3月4日～8日
3月18日	医科学研究所	平成 25 年度 医科学研究所防災訓練実施される	3月6日
3月20日	人文社会系研究科・文学部	東大文学部 集英社 公開講座の開催	～3月15日
3月24日	宇宙線研究所、Kavli IPMU	理系最前線イベント「宇宙を知りたい人あつまれ！」を開催しました	3月15日
3月25日	本部研究推進課	「リサーチ・アドミニストレーターを育成・確保するシステムの整備」合同シンポジウムを開催	3月10日
3月27日	産学連携本部	「第9回 八大学産学連携関係本部長会議」開催	2月25日～26日
3月27日	産学連携本部	東京大学産学連携協議会「アドバイザリーボードミーティング」「年次総会」を開催	3月3日
4月2日	本部学生支援課	平成 25 年度 学生表彰「東京大学総長賞」授与式の挙行	3月20日
4月4日	医学系研究科・医学部	台北医科大学との国際交流協定調印式を開催（健康科学・看護学専攻）	3月24日
4月7日	本部総務課	平成 25 年度卒業式・学位記授与式を挙行	3月24日～25日
4月10日	本部留学生・外国人研究者支援課	東京大学アサソー ディ・ケイ中国育英基金奨学生大学院修士課程修了報告会	3月20日
4月14日	宇宙線研究所	春の一般講演会「宇宙を読み解く」が開催されました	4月12日
4月18日	本部総務課	平成 26 年度入学式・大学院入学式を挙行	4月11日

お知らせ

人事異動情報など全学ホームページ「お知らせ」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/>)・東大ポータル等でご案内しているお知らせを一部掲載します。

掲載日	担当部署	タイトル	URL
4月1日	本部人事給与課	人事異動（教員）	http://www.ut-portal.u-tokyo.ac.jp/wiki/index.php/人事異動（教員）
4月3日	キャンパス計画室	「東京大学キャンパス計画大綱」の制定について	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/2172/
4月7日	広報室	部局長の交代のお知らせ	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/2124/

部局長交代のお知らせ

2014年4月1日付で、下記の通り部局長の交代がありました。新部局長の略歴・前部局長の退任挨拶は上記「お知らせ」のURLをご覧ください。

	新部局長	前部局長
大学院法学政治学研究科長・法学部長	西川 洋一	山口 厚
大学院工学系研究科長・工学部長	光石 衛	原田 昇
大学院理学系研究科長・理学部長	五神 真	相原 博昭
大学院薬学系研究科長・薬学部長	嶋田 一夫	堅田 利明
大学院数理科学研究科長	坪井 俊	(再任)
大学院公共政策学連携研究部長・教育部長	城山 英明	伊藤 隆敏

第87回 五月祭開催のお知らせ

五月祭は本郷キャンパスが舞台の学園祭。3・4年生が主体のため、研究展示が盛んで、国際色豊かな模擬店も魅力です。参加団体は約500、来場者数は例年10万人以上と、その規模は全国屈指です。今回のテーマは「花咲く未来、建造中」。「どの企画もそれ自体で完結するものではありません。いわば、『つぼみ』です。それぞれの企画に来場者の皆様が訪れることで初めて企画は企画としての意味を持ちます。これが、『花』です」とは、五月祭常任委員会Facebookの言。5月17日(土)～18日(日)は、教職員も花咲く未来を建造しに行くとしましょう。



五月祭公式マスコットめいちゃん



CLOSE UP

「東京大学総長賞」授与式を挙行（本部学生支援課）



授与式受賞者集合写真。



第6回世界剣道選手権大会に出場した剣道部のパフォーマンス。

平成25年度学生表彰「東京大学総長賞」授与式が、3月20日（木）午後5時から小柴ホールにおいて実施されました。

平成25年度は、課外活動・社会活動等の分野では、数独の大会で活躍された森西亨太さん（工学系研究科博士課程）、東京大学運動会競技ダンス部、東京大学運動会剣道部、大学院生出張授業プロジェクトの1名・3団体が、学業分野からは、吉田成朗さん（学際情報学府修士課程）、泉拓磨さん（理学系研究科修士課程）、森本雄矢さん（情報理工学系研究科博士課程）、日置貴之さん（人文社会科学系研究科博士課程）、阿部健さん（数理学系研究科博士課程修了）、加藤英明さん（理学系研究科博士課程）の6名が受賞しました。

また、本学の名誉を高め、学生の範となる功績が特に顕著であった団体・個人に授与される「東京大学総長大賞」には、課外活動・社会活

動等の分野で、国際大学対抗プログラミングコンテストで金メダルを獲得したチームである保坂和宏さん（理学部）・副島真さん（理学部）・今西健介さん（教養学部）、学業分野では、花粉に付着する細菌の影響をカイコを用いて明らかにした胡媛さん（薬学部）、計量経済学的手法により金融政策の新事実を示した庄司俊章さん（経済学部）が受賞しました。

受賞者には総長から表彰状と記念品、お祝いの言葉が贈られた後、各受賞者から受賞内容に関するプレゼンテーションが行われました。本学学生や教職員、受賞者関係者等、約140名が参加し、それぞれの活躍と功績を讃えました。

授与式の後、山上会館で懇談会が開催され、受賞者や本学役員、教職員が親しく交流し、互いに良い刺激となりました。受賞者のこれからのさらなる活躍が期待されます。



CLOSE UP

文学部が集英社と公開講座を開催（人文社会系研究科・文学部）



加藤陽子教授による「日本近代史から考える憲法問題」の講義風景（3月15日：法文2号館1番大教室）。

東京大学文学部では、2013年9月より、株式会社 集英社との共催による公開講座「ことばを読む ひとを知る」を開講しました。

本講座は全12回の完全登録制（登録料・受講料ともに無料）で、高校生以上であれば誰でもご応募いただける、広く一般に開かれた講座です。開講初年となった2013年度は、柴田元幸教授（アメリカ文学）・渡部泰明教授（日本文学）をコーディネーターに、「歴史」「文学」「思想」「芸術」など、それぞれの研究分野の最前線を牽引する本学部教員および名誉教授が、長年の研究成果をわかりやすくお伝えしました。

本学部教員とは別に、著名な文化人をお招きすることも本講座の特徴です。昨年度は招待講師として、漫画家の荒木飛呂彦氏、作家の川上

未映子氏をお招きし、特別講義を行っていただきました。現在、日本の漫画界・小説界の最前線を駆ける表現者ご本人から、日々の創作に関わる大変貴重なお話をしていただきました。

昨年度は定員150名のところに1000通を超える応募がありました。受講者の年齢層も10代から70代まで幅広く、講義後には活発な質疑応答が交わされました。最後の講義（3月15日）終了後には、「出席優良」と認められた受講者への修了証の授与が行われました。修了証授与者は80名。そのうち全12回出席された皆勤者は27名でした。

2014年度は、柴田教授に代わり野崎敏教授（フランス文学）がコーディネーターを務め、6～12月（8月を除く）の期間に開講します。

関 連 URL : <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/program/shueisha.html>



CLOSE UP

女子中高生のための理系最前線イベントを開催（宇宙線研究所、Kavli IPMU）



お菓子をつまみながらの懇談会では、宇宙や研究生生活についての活発なトークが炸裂していました。

3月15日（土）、国際高等研究所カブリ数物連携宇宙研究機構（Kavli IPMU）と宇宙線研究所が主催する理系女子中高生向けのイベント「宇宙を知りたい人あつまれ！」を、Kavli IPMUにて開催しました。

本イベントは宇宙に興味がある女子中高生に向けたもの。今年は定員を大幅にうまわる応募があったため、抽選で選ばれた35名が参加し、宇宙研究の最前線で活躍する研究者や大学院生と、大学生生活や研究のことについて話しました。

当日は、オリエンテーションとKavli IPMU日本学術振興会特別研究員 石垣美歩氏による講

義「星々の元素組成から天の川銀河のルーツを探る」の後、参加者と研究員、大学院生でランチをとりました。午後は、宇宙線研究所特任研究員 百瀬莉恵子氏による講義「Galaxies in the Universe」、大学院生による重力波実験「アインシュタインの奏でる宇宙からのメロディー～重力波を聞こう！」の後に懇談会を行いました。

参加者からは「難しいことも分りやすくおもしろく説明してくれた」「内容が濃く、得られるものが多かった」「TAや講師が気さくで話しやすいかった」などのコメントがよせられ、宇宙の研究により深い関心を抱いた様子でした。

関 連 URL : <http://www.icrr.u-tokyo.ac.jp/event/2014/riken/index.html>



人間力の鍛え方教えます

「人間力を付けて下さい!」。4年前、入学式での濱田総長の式辞に込められた言葉には感動した。最近では「タフな東大生」というキャンペーンもある。人間力と同様、逆境や失敗にめげない精神的に強い根性のある人間を目指せという意味である。筆者も大賛成。すべて良いことやるべき。しかし、ちょっと困った。

学生たちには人間力の鍛え方が分からない。受験のプロ?として幼少時代から鍛え上げられた蒼い脳を持つ学生には難題である。塾や衛星セミナーどころか教科書もない。人生初の大問題かもしれない。

たまたまこの学内広報を手に取り、後から読もうと丸めた冊子の外側に「淡青評論」を見つけた悩めるあなたはラッキー。

人間力の鍛え方は簡単。「他人のお世話をすること」。これが王道中の王道。

困っている人を助けることは、その気さえあれば日常茶飯的にできることである。重い荷物を持って歩いている老人を助ける好青年なんて想像しがちだが、今の都会ではそんなシチュエーションは探すのに苦労する。もっと日常的なことでもいい。たとえば、教授が消し忘れた難解な数式だらけの黒板を消してあげる。講義が終わったら電灯とエアコンを消して出る。親兄弟に友

人、クラブやサークルの手伝い。論文締め切り目前、頑張っている先輩のお手伝いなど、その気になって見渡せば、お世話を欲しているシチュエーションだらけである。

なぜ他人のお世話が人間力の増強になるのか。これも簡単。お世話をするには、まず困っている課題、対象を発見しないといけない。つぎに置かれた状況を総合的に把握し、自分の能力でできる解決策を考案、即座に行動に移ることが肝要となる。このプロセスは秒単位でありタイミングを逃してはいけない。限られた時間、限られた能力での意思決定と行動が鍵となる。しかも時には予想に反した結果になることもある。その対応策には、さらに高度な行動戦略が必要となる。たとえば車内で老人に席を譲ったら、お礼の言葉どころか、気持ちが若い老人に気分を害されたなんて経験はあるはず。このフォロー策は宿題としたいが、こんな簡単なイメージーションと行動の積み重ねが社会に貢献できる創造的な人を創ってゆく。

今日からやってみたらどう。

生田 幸士
(先端科学技術研究センター)